断片

二〇一四

u_

（暖かい日は…）

暖かい日は、走り続ける。それで喉が渇けば、もう水場が見付かるまで止まらない。足ばかり先走り、のけぞる背を振り戻す度、目は遠い地面を舐め上がってはつんのめるので、空は後ろへ弓なりに撓って放られ、その粘泥のように引き延ばされて前のめりにぐにゃりと裂けた真っ青な高みには、恥でも晒すように、闇である筈もなさそうな闇が、透き通るかに覗いてしまい、そうして空はその辺りで、足の振り出されるのに合わせて、透き通る闇の裂け目を拡げたり塞いだりで、何かを激しく呼んでいるようなら呼ばれているのは、水場の脇の叢を引き摺られて行く、痩せた小さな屍に違いない。陽をたっぷり浴び、周りの草にも包まれて、それはすっかり温かく、その温かさに誘き出された、たっぷり甘い死んだ匂いが、そのまま空まで届く程に風は已み、空の裂け目の奥にまで吸い込まれるなら、時は止まっているのかも知れず、陽は暮れそうになく、一度水場で喉を潤せば、肉が裂け骨が潰れてでも、足は止まろうとしない筈。しかし水場は。確かに屍の周りに水の匂いは噎せ返る程でも、肝腎の水

に口を付けていない。水を探して分かり切った所を何度も行き戻りするのは、高みを見上げる勢いに任せて何処へとも走り続けるより、余程酷く足に堪える。動かしている積もりが、足は止まっているか、そうでなければ、確かに交互に振られてはいても地には着かず、斜め上を向き損なっては宙を蹴っている。しかしそのせいで、跳ねる体は地面の僅かな傾きを知り、低い方へと滑って行ける。当然それだけ、水への望みを抱ける訳だが、どことなく空しい望みでもあるようなのは、喉の渇きが求めているのが、果たして水であるかどうか疑わしいからで、寧ろ喉は、渇き果てて血も出ないまま固く引き裂かれるのを求めているいないか、水は正にその呼び水に過ぎなくて。それならそれだけの事だが、低い方へ滑った筈の身は、何時の間にか足は溶けたか背は玉のように丸く、ふわりと浮くようで、その鼻先に、何の匂いもしない瘦せた小さな屍が、薄っぺらく潰れた胎児の形の円盤でもあるかに、艶艶とじっと横を向いている。それは何処か水のようで、しかし屍の色と水の色とは、どちらも空に対して妙にいじけて諂うようで、全く見分けが付かず、胎児の形の水盤のすれすれまで盛り上がるように注がれた水に映る硬そうで刺刺した景色が、どう見ても屍の絵柄になってしまっているだけでは。勿論そこには、高みの奥の透き通る闇も必ず映り込んでいなければならない。きっとそれは、閉じるのを拒み続ける屍の目の暗い底に張り付いている。しかしそれを探り当てられそうにないのは、屍の絵

柄が、動く筈のない程に硬そうなのに、水の面を忙しく色と形を常に揺き回すようにぐるぐると動き回っているからで、ただその動き回る様を屍の絵柄と見誤っている、そう疑われるからでは。色と形が定まるなら、必ずそれを定めた命がそこにある筈で、色と形が常に揺き回されては、そこに命の留まりようはない。屍と見せるには、命の痕が残されていなければならず、それは空の高みの奥を透かしてしか見出しようはない。走れずに居て、どうして空が裂けようか。それなら水に映る景色の何処にも命の痕はなく、それならそれは、初めから命のない死んだ景色で。屍に会いたいなら、別の何処かへ滑りでもする。会いたくもないなら留まって構わないが、そのまま死んだ景色に呑み込まれたくもないなら、目だけでも逸らすべき。その逸らした目が、屍の目。動くにしても。他に何の目もない。いやそこに目があるか、ただ水の動くのが、目に擬せられたか何かの事。するとそれはそのままに、目そっくりに、痩せた小さな屍にも擬せられているのは明らかで、或いは明らかでもないなら、そう思い込まされるより逃れようはなさそうで、するとそれは、水の動きさえ、そう擬せられていると明かされて、ではそこに在るそれは何。分かりようもないなら、取り敢えず一つの謎として、手にも取れる一塊の姿にして、そこにぽつんと置いて去る。するとそこからは、逆さに透き通る闇が、高みにまで見通されるばかり、しかし何故それを逆さと言わなければならない、一体、透き通るに、逆さ

も逆さでないもあるか。それもまた一つの謎としてそこへ放り上げるしかないなら、謎と謎に挟まれて、或いは自らをそう追い込んで、そこを抜け出そうとする程に丸くなって、呆けたようにくるくる回り続けるしかなさそうで、それは、水である他に何であるか。勿論、何でもある。しかし何でもあるならまた水へ戻って、屍の姿を、恥でも晒すように深く沈めて露わにする。沈む程にそれは、何処かへ送り込まれるのを察して身構えるようで、その身構える先は、真っ青な高みでなくて何処。いや断じて空ではない。或いはそうであったかも知れなくても、その身構えの頑なさが、高みなど疾っくに見失い、真横に滑るならその滑る方へ、自らを送り込もうと、在り来たりな伸び縮みを繰り返すばかり。その何処が屍の姿か、などと疑うべきではない。何故なら、空の高みを失った同じ類いの、激しく震えようが、跳ねようが、屍と呼んで差し支えなさそうな、水に浸かったまま決して水面から頭を出さない、赤みを帯びた嘗て命であった姿の波打つ影のような形を、幾つも幾つも脇に並べては、壊れたように伸び縮みを繰り返すのを已めないので。まるで絶えない波。しかし、であるなら、その屍の姿を放って置いて良い筈はないが、屍向きに限らず、何の容れ物も拾えそうにない。何の容れ物も拾えない景色。その景色さえ、剥き出しに放り出されている。いや景色などない。景色とは容れ物の集まりに違いないので。屍は、そうあるように置き捨てられるしかなく、であるので屍。しかし、

であるなら、その姿を露わにして、忘れてしまった恥でも晒し直したいのなら兎も角、それで何を呼び寄せられる。勿論、何でもある水に、改めて呼ぶもののもないだろうが、ないからと言って、呼ばないとは限らない。真っ青な高みの透き通る闇が、痩せた屍を激しく呼ぶのなら、逆さに透き通る闇の底か狭間で回る水も、必ず呼び返さなければ済まない筈。でないなら、透き通る闇のままに、ぐにゃりとでもした空の他は、全て底が抜けているしかない。しかし空そっくりに屍を呼んでは呼ばないも同じ。その逆が呼ばれなければならないが、それが何と分かるまでもないのかも知れず、呆けたようならそれで、空の呼び声を跳ね返し裏返して、高みにまで届けているのは明らか。底が抜けていたら、そうはならない。或いは、その明らかなのが災いで、謎の一塊は取り逃がされ、そうならもう底はないが、それで何。空は裂けている。じっとそのままで何処にも決して裂け目の見付からないまでに。それで謎などに拘る方がどうかしている。屍の姿など追わず、ただ死なせてしまった事を呼び返すようにでもして、その呼び出された色と形に容れ物を与えようとする。容れ物を拾えないのは忘れた事にして。それならもう呼ぶものが違う。同じかも知れないが、違っても同じでも何でも、それらは透き通るとも見えずに透き通って重なるばかり。その僅かに重ならない、呼び声のどれにも共通な底でもあるらしい辺りに、確かな硬さの容れ物が手に取れそうなら、それを撫で摩る手付きを塗り固めるよう

に重ねていれば、自ずと屍は、その中へ送り込まれて来ていて、謎の替わりに、その屍を納めた容れ物が置き去りにされた景色の前で、呼び声も動きも失って、なので水も空もなく、ただ景色ごと持ち去られる時を待つ。透ける闇を、闇とも見えずに透かし見ながら。そうして待つ身のまま、水に運ばれて持ち去られるようなら、「あいつは、空の高みの奥をぐにゃりぐにゃりとのたくる真っ青な時と混じり合うのだ」と言う声も聞けるのかも知れず、それなら、そうならないよう考えを巡らせられもして、時を待たされる景色に背を向けた、丸くも丸くなくもない、ふわりと浮くままの走る姿に、（二〇一四年一月二十四日）

（尋ねられても隠した覚えは…）

　尋ねられても隠した覚えはないので聞こえない振りをすると、それは太い骨で、その骨から生まれて、ここに寝そべっている。勿論、尋ねたのに聞こえない振りをされた奴によって、そうされてしまうだけだが、それで困りもしないし、骨から生まれたのなら、きっと硬くて強くて、何から生まれたか分からないままより先の見通しも立ちそう。しかし、その見通しによって却って、行き止まりへの近道が導かれてしまう、そんな事も身に覚えがありそうで、何の覚

えもないが、その太い骨を忘れる訳にも行かなそう。それを見透かすように、骨の行方を尋ねた奴は、態とのように、ゆっくりと丸く大きな柔らかそうな背を向け、何も失うものはないとばかりにそそくさと立ち去ろうとし、それに釣られて身を僅かに起こしたのは誤りかも知れないまま、太い骨の在処が知れる。それは腹の中。骨を孕んでいるに違いないのは、少し重いから。骨はじわじわと伸びて脹れ、骨を産み落とす穴など持っていないのもじわじわと気懸りだが、まさか骨が体を突き破って飛び出したりもしないだろう。高を括っているだけかも知れなくても、そう出来るのは、目が見えなくなるのを、もう長い事待っている、と言う覚えがあるから。体の形は骨に近付く、骨の形も体に近付く。そうして、体が骨であり骨がそのまま体である、そうなるまでにそれ程の時も掛からないようで、それはただ目の明るさを失うための事。そのために手足も口も他の穴も出っ張りも全て失っても、それらは取るに足らない。何も見えなくなりさえすれば、嫌いなものを好きなものと幾らでも取り替えられる筈。しかしその時を思い描くだけでもう、何が嫌いで何が好きか一つも思い付かない。だからに違いない。私達は、翳んで行く目を目一杯見開いて、短く硬くなった腕で、ぎこちなく、すらりとして捉え所のない一つの裸の輪郭の形を奪い合っている。それには好きと嫌いが詰まっているとでも。しかしどの腕ももう短過ぎるし、ただ骨が出っ張っているだけのようで、どれもその形に掠りもし

ない。となればそれが形かも疑わしい。私達の変わって行く姿の輪郭を束ねて一塊にした、触れようもない、裸の形に見ようと思えばそうも見える、私達に取り囲まれてだけ濃い色を表せる、厚みだけはある翳んで滲み出る影のようなものか。しかしその中に透かし見られるのは、疵一つ影一つない、ずんぐりと丸くはあってもその輪郭の流れる水のように綺麗に滑らかな一つの骨で、それならその影のようなものだけが、真っ当な骨を孕んでいる訳だ。となれば私達の孕んでしまった骨などは、骨にもならない、どろどろと粘っこいだけの、捩れた棒の姿はしていても、それはこの影のようなものを取り囲んでいられるからで、何を奪い合っているのかも分からなくなれば、もうどんな姿とも、自らにも見極められなくなるのは明らか。勿論、それで困りもしない。骨の事など知らない。何を孕もうと、その孕まれたものの好きにすれば、それで構わない、それでこの身が引き千切られるにしても。いやそれは随分な買い被りで、引き千切られる程の身など何処を探しても見付からないに決まっている。私達、の、しかし何故私に達が付くのか、達に私が付くのか、さっぱり分からないが、その私達には、影のような中に透かし見える綺麗な骨だけが頼りで、それはそこに孕まれたままのような変わり行くものではなく、既に産み出され、そこに守られるしかないもので、それなら私達は、それに寄って集って害を加えるもの。それならせめて私、の、何故私達から達を切り離せたのか、達から私を切り離

せたのか、さっぱり分からないが、その私だけは、影のようなものに見て取った通りの裸の輪郭を纏って、その己の確かな形を綺麗な骨に晒して、身の潔白を証したい。しかし私から切り離された達共、の、何故達に共が付くのか、さっぱり分からないが、達共が、硬く脹れて繋がって、私を押さえ付けに掛かるのは、その重さより、ざわざわした互いの遣り取りから知れる。冷たいと温かいを織り交ぜてされる、その遣り取りは、私の裸などより余程、綺麗な骨のお気に入りのようで、私などはもう、裸の輪郭を残して、その中味はすっかり何処かへ搾り出されて腐って何だか分からなくなって捨てられた中に違いない。しかしどうやらそうして、その何だか分からなくなったものは、綺麗な骨によって孕まれていて、その骨の腹の中に居て、生まれながらの一つの骨として、その孕む骨そっくりに一からすくすくと育っているではないか。それなら何故、私達から骨達が離れ、達に共が付くか、全て分かる。その分かった事によって、骨を孕む骨と骨に孕まれる骨は、二重三重に守られて安らかに違いない。とは言え、在り来たりながら安らか程危うい。少なくとも危うさへの恐れから逃れ難い。その輪郭の流れる水のようである事で、自ら危うい水を呼び寄せてしまっている。少なくとも、その恐れから逃れようはない。恐れが既に水。今こそ、骨の行方を尋ねて去った奴の行方を奴に尋ねなければならないが、どうやって、のどうやってが曲者、無理にも水を呼び付けてしまいそう。しかし裏を返せば、

そのように危うい程安らかでもあって、迫り来る恐れと共に水は一度は去って、何処かをぐるりと巡って骨に孕まれた骨に孕まれる。それは小さいの極み。隣にどれ程可愛い何を持って来ても、粗く馬鹿げて大きくしか見えないだろう。僅かその小さな水が、他の何もかもを、それを孕む骨さえも殆ど見えなくして、僅かに朧に翳む出来損ないの影のようなそれらを弄べば、嫌いなものなど跡形もない。嫌いなものが跡形もないなら、無理に好きなものを探すまでもない。探せば却って、探す事を嫌いになってしまうかも知れないし。そこへ骨の行方を尋ねて去った奴に似た奴が、紙の裏から表に透けるように戻って来る。いや似てもいない、全く別の奴だ。しかし、そいつは骨の行方を尋ね、答えを待たずに去るに違いない、そう思わせる物腰で、だから音もなくそっと直ぐに間近にまずで擦り寄って来て、何処か痛い所はないか尋ねるに決まっている。正に痛い所を突いて来た、痛い所とは、そのまま骨だから。そうしてまた態とのように尖った動きで、これ見よがしに骨張った背を向け、何も失うものはないとばかりに立ち去ろうとし、それに釣られて、尋ねられて気付かされた痛みを痛みの中から撚り出すように、身を僅かに起こせば、その身か骨か痛みかは、そのどれでもない何かに移し替えられなければ済まなくなって、それをしてくれるのは、ただ一つ、すらりとして捉え所のない一つの裸の輪郭の形に違いないが、どうやらその中に何か嫌いなものが含まれているらしく、それは何処を幾ら探して

も見付からないと、探さなくても分かってしまう。分かったから何。分かった事など知らない。だから骨と痛みも知らない所までは奴も知らない。しかしそれが自ずと奴だけに、その知らない所までは奴う。構うものか、それなら奴もその裸の輪郭の形を見付けさせてしまう。構うものか、それなら奴もその裸の輪郭の形を見付けさせてしま全てを何の形も残さず遠ざけられたと言うもの。しかしそれで却ってその更に遠くへと、小さな水は遠ざけられ、骨に孕まれた骨が孕むのは、その水との距たりばかり。そこを水が通って行ったのは確かでも、その虚ろさには気が沈む。そうして知らず、その距たりに、線より細い痛みを突き通して行けば、その距たりによっては何も決まらないのだと分かって、また骨に孕まれた骨が孕む中へと、恙なく安安と戻れるのは何。暗いとも明るいとも知れない程の目の暗さ。いや目の事でもない、その骨が次の骨をその中に孕むための小さな暗さを水の跡から運んで来るもの。そんなものでは決してない。骨に孕まれた骨が孕むのはもう、強く反り返ってそれを孕む骨を突き破り、その骨を孕む骨も突き破り、その骨を孕む骨も、と骨は骨を孕み重なって伸びるのを已めないのを明かして、

（二〇一四年二月二十二日）

（食うのは辛い…）

食うのは辛い。辛いのは面倒だ。それならいっそ食われてしまおう。「面倒？辛いのは分かるにしても、何故辛いのが面倒なのか。ただ辛いだけなら、食って行けるのか？」そんな難癖が面倒だが、食う辛さの面倒より知れてるから答えてやるが、ただその前に言っておくが、お前の後ろには、お前を今にも食おうとしてている奴が居て、しかしお前は奴を有り難い守り神か何かと勘違いしている。もうそれが答えだ。後は、それはお前が始末するしかない面倒で、面倒見切れん。俺が求めるのは、俺を食う奴だ邪魔するな。「それなら邪魔しない。直ぐにも食ってやる。望むなら、もっと食い意地の張った仲間も呼ぶ。」ただ面倒が分からん。分からん奴を食うのは気が悪い。食うのが辛いのは俺だって初めからそうだ。辛くて当たり前なんで辛いままでいいじゃないか。辛いのをを逃れようなんて考えこそ面倒で要らない。」その前口上が要らない。さっさとお前の食い意地を見せてくれ。早くしないと、お前が先に後ろの奴に食われるぞ。「そうしてお前は俺に余計な事を考えさせて、俺にお前と似たような面倒を植え付けようとしている。それがお前の魂胆で、食われたいなんて嘘だ。」そう思いたいなら勝手にしろ、余所を当たる。俺がお前に背を向ければ直ぐにお前は後ろの奴に食われるだろうな。お前の面倒が始末出来て羨ましい限り。「そうか分かった。多分お前は俺を騙しているが、面倒だから、さっさと食っ

てやる。」さてそうして、食う奴は食い、食われる奴は食われた。それは間違いない。俺が食われたか食われなかったかは知らないが、その俺は、如何にも食い意地の張っていそうな、臭い涎をだらだら垂らすのを競っているような奴らに取り囲まれていて、その言うには「面倒なんて俺らの知っている限りでは何処にもない。多分お前は、辛いのを忘れてしまって、それをまた思い出そうかどうか考えて決めるのが面倒なんだ。食うのが辛ければ、生きられる。しかし食うのが辛いと思い出せたとしても、思い出された辛さは、確かに面倒なだけかも知れない。」また面倒な奴らが出て来たな。ところでさっきの奴は、お前らが食ったのか。そうだろう、何故俺だけ食い残す。「ただ食えば良いのさ。思い出すも考えるも決めるも要らない。」だからそれも面倒なんだよ。「と考えるから面倒になる。何故考える。食うのが辛いだけで何もかも済む。」お前らはそうなんだろう、が、何故かは知らんが、お前らとは違うらしい。「そうか、じゃ食わせて遣る。」さっきの奴の勘違い贋守り神が、丸々と太った姿で甦り、もうそいつに飛び掛かっていた。しかし俺の牙が肉に届く間際で、踏み留まった。食うのは辛い。耐え難い程に。何一つ済む筈がない程に。確かに面倒など何処にもない。有ったとしても全く取るに足らない。俺は今直ぐにも食われなければならない。そうでなければ耐え難いし、何一つ済む筈のないここが、跡形もなく破裂するのは明らかだ。何一つ済まないのだから。俺はもう破裂して

いないだろうか。「でも何も起きないだろ。簡単さ。食うのは辛い。食わないのも辛い。」両者痛み分け。どっちへも転ばない。ここはこのまま。お前はお前のまま。」よし分かった、辛いのは、食うからで食わないからだ。それで何の面倒もないなら、さっさと俺を食えよ。それで何の面倒もないだろ。で、俺は食われたに違いない、食われない訳は何処にもないので。その俺の前に奴らは居なくなっていた。俺は食わないし、それは辛いが、それは多分当たり前なので、それで何もかも、かは知らなくても少なくとも、辛いのは辛いままに済む。つまりもう食われたくもない。食いたいなら食いたいで済みそうだ。食うかどうかは成り行き次第で構わない。食われてしまったからには、俺はもうそんな事らしい。実際獲物は肉の匂いをぷんぷんさせて次々に現れては、黙って脇を擦り抜けて行く。食っても食えなくても辛かったのが嘘のよう。吃驚する程に俺には係わりない。脇を擦り抜けるのも邪魔、触れたくもない。後ろでその肉の匂いが血の匂いに塗り変わる気配に振り返ると、体を前後左右に馬鹿みたいに揺らして獲物を次々に食らう奴が居る。そんなに食うのが楽しいか。「そんな事を尋ねる奴は初めてだ。で答えだが、楽しい事なんて一つもない、でどうだ。」じゃ辛くはないか、と尋ねそうになったが已めた。辛い辛くないは済んだ筈。「不服か。俺が楽しいか楽しくないかより、俺が食っているか食っていないかなら、少しは増しな答えも出来そうだが、どうする。」成る程、それ

はもう答えだな、お前は食うようで食っていない。或いは、食ってはいても、お前に食われたものは、お前に食われていない。お前の遣っている事は、お前だけの事なので。違うか。「違っても違わなくても同じ。」つまり違うって事か。「違うのは、お前は食われていないし、お前を食える奴なんて居ないだろうと言う事だ。」だろう、とは何だ。「俺の知らないお前の事を、お前は知るかも知れないから。」それで分かるのは、こいつは決して俺の獲物ではないし、俺もこいつを食わないだろう、と言う事だ。「だろう、とは何だ。」知るか。しかし俺達が他とは分かり合えなかった事を分かり合っているのは確かで、それをこいつに分からせるために、こいつの獲物に俺も食らい付きたくなって舌舐めずりした。「そこまでだ。それより遣ると元の木阿弥どころか、辛いのままでも台無しだぞ。」そう言われてしまえば紛れもなく、何を食おうが食うまいが何に食われようが食われまいが、辛い他に何もなく辛い。ただ辛いしかないなら、やはり食うしかない。その辛さを食えるように食えるものなら何でも。そんなものは、こいつの他にない。こいつを顎任せ、牙任せに食い、骨をしゃぶって遂には溶かして跡形なく啜り尽くした。食うとは、こんな事だったか。これまで食ったのは何。或いはこれまでが食うなら、これは食うでない何。辛いのを食い尽くせたかどうかは分からない。分かったところで仕方ない。何故ならもう食えるものもなさそうだから。「そう、食えるものは皆食ってしまったから。

でもそれは、食えないものなど何もなくなって何でも食えて、その何でもは何処にでも見付かるので、その辛いのを食い尽くしたければ思いのまま、だが切りがない。」誰だ、お前。とは俺独りが言ったが、奴の言った事は、俺も奴と一緒に言っていて、それが変でないのが変。「変は変。俺はお前を食い尽くし、その俺の鏡のように、お前は俺を食い尽くしたので、俺達は同じで、俺達は食えるだけ食える。見ろよ。」とまた、奴と声を揃えて同じ事を言って、見ると、食ったり食われたりするだけの奴らでびっしり、地の果てまで。「俺達だけが違う。」とまた声を揃えてしまった俺達って誰。お前が俺を食ったにしても俺はお前を食っていない。「同じ事。」と多分その奴だけの声の辺りへ牙を剥き、砕ける限りの肉と骨を貪った。「違う、お前じゃない。」とまた俺達が、その肉と骨を食うに夢中の奴の側で声を揃えていて、食う奴がそいつの食う様そっくりに食われ尽くすのを眺めてから見回すと、どうやら独りで、いやその俺に纏わり付いている、俺に食われる他に何の楽しみもなさそうな奴に、「食われる他にないって、それは思い込み。食う辛さを取り戻す、そのための。」と言われたが、それを一緒に言ったかどうか分からないので聞こえない振りを決め込むと、地の果てまでくっきり見渡せる食ったり食われたりする奴らに囲まれて間違いなく独り切りで、それが何処となく辛いのが酷く辛く、しかし酷いにしても比べるものもないなら孰れ知らず掠れて消えそうでもあって、そうであるし

ので却って辛さは残って行きそうで、「だからそう言う事。」どういう事だ。「俺とお前とだけで俺とお前だけを綺麗に食えたから、言う事も何も一緒。ただ他と違うだけでもあるが。」と間違いなく一緒に言ったが、それをさっきの奴が聞こえない振りで聞いているのが分かって、そいつに独り食われるしかない、誰に纏わり付かれてもいないひょろりとした俺の無様さをこっそり笑うのが、食うでも食わないでもなさそうな面倒な、きっと俺には食えない奴で、（二〇一四年三月七日）

（喉を潤そうとも今更…）

　喉を潤そうとも今更したくもないなら、いきなり追い詰められたらしい。逃げ場もないなら、それでもまだ手放していないのは、そうとも思い難いが、多分何かの喩えが一つ切りで、きっと他は皆手放した。運び去ってくれる風も水も来ないので、手放されたものは、そのまま、硬くなって脆くなって軽くなって、で、中身を刳り抜かれたように柔らかくもなって、辺りにびっしり固まってねばねばと盛り上がって、行く手はすっかりそんなものに塗り込められてしまって、狭過ぎて、その狭さは岩盤のようにどうにもならない。まさか何も手

放さずに居た方が身軽だったとか。何のために手放したか分からない。その狭さの重さに毒されてか、ただ一つ手放していない喩えも、それは、この喩えでは何も喩えられなかったと言う喩えか、そうでないなら、喩えられるのはただ、喩えでは何も喩えられない、喩えは所詮そのようでしかないと言う喩えで、尤もそんな事になってしまうのは、その喩えられるしかない何かのせいで、であるなら喩えは、その喩えられない事で、その何かと少しも係われなかった訳ではないが、いや「その何か」も、出来の悪い喩えに過ぎず、それなら、ただ喩えだけがあって、それと何かを結び付けようにも空回り。それなら、この喩えが何時何処から来たか。どんな経緯でこうして、まるで一心同体であるかに、そればかりを握り締めるままか、幾らかでも分かれば、手放して構わないとも思えそう。喩えなのに何も喩えていないとしか分からないので手放せないだけかも知れないし、と、その手にそっと目を落とすと、そうするのがどうやら初めてと気付くが、その手に握られるのは、どう見ても、土色に紫を塗して艶艶した、萎れて乾き掛けて細かく震える、手よりも何倍も嵩のある一枚の平べったい茸で、そこから滲みたぬるぬるした液が、すっかり手の甲を明るい色に濡らし、腕までが黒光りする暈で覆われている。或いは茸でなく茸に似た形の生き物か、などと気を揉んでしまうのは、今にもその肉の香りの染みていそうな旨そうな液をずぶりと啜ってしまいそうだからで、喩えを喉に流し込んだりし

ては、何を仕出来されるか知れないのに。しかしそんな気懸かりも喩えなら、まだ知れていない事が仄めかされているようでもある。啜るのは堪えて、味見位はと舌を寄せると、茸を握るのは、濃い色の毛で覆われた獣の手で、仮にこちらも獣であったとしても、それは別の奴の手に違いなく、腕を覆う黒光りする暈はぐらぐらと揺れ、腕の付け根もその先に繋がる筈の胴も、すっかりぼやけさせて、その奥で、何処か擦れっ枯らしな響きが耳障りな産声が、くねくねと波打つように唸っている。産声なら、今さっき生まれた筈。ただ今さっきからこの今までの間にどれ程の時が経ったか、声の主にはほんの一時でも、その周りやこちらには、かなりの時なのでは。そうして茸を握る手も、ぼやける方へ距たって行けば、喩えはもう手放すも手放さないもない元々別の奴が手にしていたと決まりそうだが、そうでもないらしく、それを見送ろうとしてしまうのが新しい喩えであるしかない。などと分かったような気になって済むのでもない。そんな喩えでは何とも覚束ない。ちゃんと手に出来ていないなら、捨てられたも同じ。捨てられた喩えを側でぼんやり眺めているだけでは、それが何も喩えていないとも分かりようはなく、そんなものなら進んで捨てて、手放されたものばかりに塗り込められた狭過ぎてどうにもならない方へ身を捩込むべきだが、もう狭さも重さも知らない。裏返された小さな瘡蓋に隙なく包まれ、押し詰められたように、その中に塞がれたような。盛り上がっていたねばねば

も、何時の間にかすっかり縮んで硬く固まって、ざらりとした瘡蓋の肌触りしか残さないのなら、そうでしかない。そのままじっとするしかなくても、その裏返しの瘡蓋の塊が、どうやらくるくる回っているようでは、じっとするのも目が回りそうだが、目を回すならその塊では。塊に目が有ったか知らない。その知らない方の塊の目と目が合ったか知らないが、目はきっと、回っている目を見付けていて、その回っている目は、それを見詰める目を招き寄せようと回っているらしく、それならそれを見詰めてしまったのが運の尽きで、目はもう何を見詰めるもなく、ただ回る。そんな目こそ捨てて放って置くべき、と決まったが、それに抗うのは、その捨てて放られる目が、それまでになく分かり易い一つの喩えで、それを拾って、そのちゃんと活かせる方へ放てば、その喩えられたものが、広広とした海原を伸び伸びと泳ぎ回るかの姿さえ見せてくれるのでは、と言う望みで、ただその望みにとって、瘡蓋の内側に塞がれるのは息が詰まり、遂にはその望みから進んで裏返って、その絶たれた望みが瘡蓋を外側へ切り裂けば、まだ産声の止まらない濃い色の毛で覆われた獣の、ふわりと丸っこい姿が、広くも狭くも明るくも暗くもない僅かに窪んだ温かそうな所で、くるくると転がっているのと、向き合うしかない。その姿は確かに直ぐ側だが、産声は少し遠く、その転がり続ける窪んだ所は、決して行き着けない程に遠くて、その姿に迂闊に近寄れば、いきなり見知らぬ冷たい辺りへでも放られて戻

れないのでは。そんな恐れに囚われるから喩えを喩えとも分からないし、活かしようもないんだ、と言う声も聞こえそうだが、それを振り払えば、獣も産声も窪んだ所も振り払われ、一枚の平べったい茸がびらびらと揺れている姿が、当たり前にそこに入れ替わるのでは。勿論、振り払えるものなどない。獣の手を探したが見付からない。きっと獣は、腕を腹の下に畳んで眠り込み、まだ寝息と産声を分けられない程に幼い。しかしそうなら、擦れっ枯らしな響きは愈愈耳障りで、どんな初々しい喩えを掴み取れても、忽ちそれを干涸らびさせてしまいそう。寝息と産声すら未だに分けられないのは、そのせいでは。喩えが一つでも獣の身に馴染めば、獣は幼さから抜けられる。それには茸の液を啜らせるに限る。それで擦れっ枯らしな響きは治せるのではないか。などと分かったような気になれば、それで済む。それでさて絶たれた望みに立ち戻れるとして、もう一度それは裏返り、喩えという喩えが、至る所から滾滾と湧き出すかも知れないが、それが何。それらは、獣の眠る窪んだ所より、もっとずっと遠い。遠過ぎて眠気すら誘うどころか眠気そのもの。しかしその眠気こそ、ただ一つ身に馴染む、それを活かせているとはっきり分かる、手放しようもない喩えなのでは。などと分かったような気になれば、茸の形の生き物の寝息が、獣の産声と寝息の奥から微かに洩れているのが聞き取れるか。勿論、聞き取れない。いや、そうとも決め付け難いのは、茸の形が、裏返り続けた果ての形に見

えて仕方なく、つまり茸は、どんな新しい喩えからも、それを裏返し続ける事で逃れ、それでいて却って喩えの直ぐ裏側にでもぴたりと張り付き、そこに息を潜めているようだから。それが眠気を歪にし、滾滾と湧き出すかも知れない喩えなど一息に磨り潰されるようで、裏返り続けるのは、喩えへの望みとその絶たれる望みの切りのない往き来で、それが茸の正体であるなら、それこそ一つ限りの喩えとしての手応えもありそうだが、どうか。いや寧ろ、茸に成り果てるまで裏返り続けなければならなかったのは、それが何の喩えとも係われなかったからで、その係わりを絶たれた始まりか、その間近にでも立ち戻らされたのでは。成る程それで擦れっ枯らしな産声とは、明け透けな嫌みか、いや繫がった。産声と茸、どちらがどちらともなく、ゆらゆらと漂うように。そうならもう産声でも茸でもない、いや初めから。などと分かったような気になれば、狭さに身が捩れる。そして、茸茸と裏返って泣く産声を、茸の形をなぞるように聞き取らずには、狭さこそ一つ切りの、どうにもならない喩えであるしかないようなら、（二〇一四年三月十八日）

（揺れる水面に…）

揺れる水面（みなも）に打たれている杙は、とても軽そうで、一輪の花に行き会えたように心を軽くするのかな。その軽い心で、杙の軽みが、花の形に描かれると、花とは何と重かったか、直ぐにくるくると傾いて回って、暗い水の下に花は色もなく沈んで、軽みだけが、水の上を滑りそうで滑らないのは、遊んでばかりに水を擽るような。花の姿を失えば、もう形には見て取れない、その軽みは、匂い。と気付いたのかな軽い心は、前のめりも立て直せず、その匂いに吸い取られ、残るのは、匂いが纏う微かな軽み。杙も見当たらないし、あれは杙でなく、棒切れがふらふら立って浮かんでいただけにしても、今更それで済みもしないし。杙には大事なものを色色と繋いで置いたのだよ時を掛けて、と叫ぶのは、花よりも何百倍も重いに違いない心を抱えてきっと哀れな奴で、縋る杙もなく、叫び終わる前にもう水の下へ跡形もないとはね。それで軽みも、軽みでもなくなって、つまりそこは揺れる水面だけで、ただそうなら、ここは水面でないとも分かって、そう分かればこそ、ここを水面から隠さなければならないが、そうは全く巧く行かないのは、ここに杙が打ち込まれている、でないなら、軽そうに浮かんだまま何処へも流れて行ってくれそうにないからで、それは丁度花一輪程に、心を重くするのかな。と、そこでまた、しかし今度は酷く弱々しく、心に軽いも重いもあるのかよ心を何だと思ってるの、と叫ばれる振りでもされたようなのに、幾ら次を待っても、それは一度切り、きっとも

う二度と心は水の上に戻れないのかな。さてそうして心もなく、打ち込まれているか浮かんでいるかの杙に繋がれてしまって、ここが水面から丸見えで隠しようもないなら、水面から送られて来る揺れやら、波打つ先に砕ける光り、風を弾いて砕けそうで砕けない静かなさざめきなどを、どう扱おうか思い惑って慌ただしい筈が、思い付く事もないので、ただ何も思わずに居ると、どうやら唄でも歌っているらしいが、何が。歌いながら、重ければ重い程に楽しい、大きな石を担いだり担がなかったりして。独り切りなら邪魔は入らず、その行くしかない所へ行くしかない、石を持ち込むに相応しい。石の重ければ重い程、その何処かは、はっきりする。ふん、唄な訳がない、あれはあれは、どれ、どれか知らない歌っているらしいのは、耳を澄ましているに決まっている、寄せ来る水は何が嫌いか、漣が必ず、それとなく仄めかすように呟いている筈、と。いやそう出来ているなら、もう聞き取れている筈、で、水から身を躱し水を惑わせているかも知れない、でも少しもそうなってない。なのでそれは唄になってしまう、水の嫌いなものさえ知れないでどうしよう、嘲るように、逃れるように。それで重い石がどうして運べる、水を働かせられもせず。それなら杙に耳を寄せ、杙は見せ掛けで実は杙でなく、中身も空っぽと分かる音を探そうにも、そんなお誂え向きの杙の姿もない。だってここは水面と離れているのだから、そうでしょ。と、杙だったかも知れない丸くて黒くて小さくて、でも酷く

鈍間そうな獣、でも冷たくひょろりともしていそうな奴に言われてしまったような。本当にそう言われてしまったなら、取り返しは付かないな。とは、何を取り逃がして、何を取り返したいのかな。そう呟けるのは軽い心か何かだけ、そんなの、もうないのに。いや、ないものが呟くのは変だけど、変でも良いのかな。いやいや変で良いなら何でも良い、少しも良くないのでここはこのこが頼みでは変には乗れない。で、獣を見付けるか、見付からないなら探し続けるか。獣とは似ても似つかないものに言われたのかも知れないし、そうなら、そう確かめるしかないが、そんな事だから、杙に繋がれるままなのだな、と嘲ろうにもその杙がなくては何とも。その何ともなしに居ると、水の色に身を隠す小さな奴が、僅かに水面から黒く硬そうな毛に覆われた鼻面を出して震わせ、黙っていたので分からないよ、と言われたのか、こちらからそう言ったのか。で次に、どっち、とはこちらから言うしかないが、その声から声に籠もる生臭さを嫌ったに違いない、その姿は、水の色に溶けて消えたが、その消えた所は突き止めたぞ。水面でもなし、ここでもなし、そこが杙なら杙の、或いは繋ぐための何かの、在処。かどうかは知らないが、知らない方が良さそうでもありそうで、その知らない辺りとは係わらないものにだけ係わろうと、身を晒すように投げ出すと、その身はただ杙に抱き付きたい姿、繋がれていなければ水に沈んで二度と浮かんで来られないような。そんな姿こそ何より隠さなくて

はならないのに選りに選って。尤も、その辺りとは係わろうとしたのが効いて、繋がれる姿は恰好だけ、それはそこに浮くばかりなら、まるで、打たれたと見せ掛けられた、ただそれきりの杙の形では。ここだね耳の澄まし所は、と思うまでもなく、耳はもう何処か遠い彼方にまで澄ましに澄まされずには済まされず、耳ごと彼方の音の方へ音もなくあっという間に引き千切られたやら。その彼方へ彼方へと纏わり付こうとする音が纏わり付くのは、水の行く重さに軽軽と転がされる重ければ重い程に楽しい、真ん丸に成りたいけれど成り損なってしまう石。或いは、その丸さが水に触れる一瞬と、それに続く石の内から湧き起こる石より少しだけ大きな生温かい響き。それが求めるのは血に決まっている、あの小さな奴のか。見付かる訳ないさ、だから求めてしまうんだね。先ずは、血と係わらないものにだけ係わろう、そうすればそこへ何処か遠くの血の匂いの向き位は知れるかも。でもそれは何の血、血でもなく、少しだけ血と係わりそうな素振りをしたいだけかも。でもそんな素振りが見付かれば儲け物、となると、そんな素振りは充ち満ちている。ここではどの色も形も光りも匂いも、その素振りなしにはない。それで却って何処かに紛れて見付からない訳か、血は。石より少し大きな石の内の生温かい響きに戻るしかないが、石の色も形もまた、血への素振りに紛れてしまったなら、彼方の彼方への音に耳が澄ませる筈もない。そうして、この辺りとは係わらないものと

しか係わりようもなくなればそうするしかないが、それで何かと係われるのでもないのは仕方のない事で、ほらあそこに奴が居るよ見えないのかな、と呟くような水の匂いばかりが押し寄せて、それに押し潰されそうにくるくる回るしかないのは、花一輪の重み、何かを纏わなければ危ういばかり。重みが纏えるのは軽みだけ、でも軽みなんてもうないからね。でもそれで却って重みのままに危ういままに、水の匂いから、水が何が嫌いか、ざわざわと言うよりざらざらと聞き取れて、そこに藻屑と消えない限り、水を操る事も出来そうな。そんな積もりで水を斜めに切れば、そこは獣の冷たい肉のような切り口を、もっと斜めに流れるように開けて、血の匂いは微かにもないが、その斜めの形に添うように、花一輪の重みの色を、水より速く染め抜いて行けそうで、それならもうその色に重みはすっかり溶けて、残るのは重みを失った花一輪の形かな。とは虫が良すぎるね、花の姿は藻屑と消えたんだよ。でもそんなもの要らなかったと直ぐに分かる。だってその消えた辺りから唄が湧き起こるのが見えるだろう、何が歌うのでもない。杭を打ちたいなら思いのまま、杭に繋がれたいなら思いのまま、きっとそんな唄。でも側にはきっと、もうただ水の色とも分かち難い光りの塊のような、あの獣の屍が動かないのかな。その滑らかな背中の線に目を沿わせれば、水は何処までも、その屍の姿と一つで、それなら奴は死ななかったも同じで、それならきっと、石の中の生温かい丸い響きの中に、石よ

り少しだけ大きく丸くなって眠らされていて、眠りながらなら水のように石を転がして運べるので、その姿は水面から隠されたままで、耳を澄ませば澄ませただけの血の音も重くたっぷりと、(二〇一四年四月七日)

(怖いものは大抵…)

怖いものは大抵、離れた、手も足も出ない高くに潜んでいる。襲い掛かられたら、そいつが例え影程に薄っぺらでも、真上からでは防ぎようがない。見上げようにも、見上げられそうな真上らしき辺りは、真上でなく見当外れな斜め上に過ぎず、真上は斜め上の斜め後ろへ後ろへと、丸ごとぬるりと一塊に、滑るように逸れて行くばかりでは、ただ影が落ちて来そうな空耳にも、どちらを向けば良いか分からず、右往左往と首を窄めるのがやっとでは。低くにも怖いものは潜んで、行き成り足を掴まれ闇の底へ引き摺り込まれでもしたら、それはそれで厄介、でもそんな事になる筈がないのは、ここより低い所などもうないからで、何もかもが、ここより高い。下は全て削り取られ、それらはきっと何処か高いも低いもない所へでも、跡形なく流されてしまって、そうしてつまり、見るもの聞くもの匂うもの、どれも高い方にしかなければ、怖い所に潜む

怖いものばかりで、それらに今にも真上から、どさりと襲い掛かられては一溜まりもない。そうなのだが、それならもう何が潜むもないし、何を怖がっても仕方ない。全てをただ高いものと一括りにし、こちらの低さを巧く用いて立ち回れば、何の助けも要らないと強がれるか。いや、そんな風に気を緩めるのこそ何より怖いが、一度気を緩めて立て直せないような、ただ何処より低い所に居続けるしかないのは、それだけでもう、決して逃げ場のない途轍もなく怖い事に思えて仕方なく、どうにも居たたまれないが、そうしてまた怖さに取り付かれれば、怖さに立ち向かおうとも出来そう。で、そこが真上であろうとなかろうと、高い方を見上げれば、じっとそうしているだけなのに、ずっと変わらない温かい何かを、しっかり懐に抱え込んで、必ずそれを届けなければならない所へと運んでいるに違いなかった。きっとそれは、何より知っているもの、そうでないなら、何より知らないもの。或いは、知り過ぎて何も知れないか、何一つ知れなくて却って何より知れてしまいそうなもの。一度失えば決して取り戻せない。だから何時も周りから狙われて、実はそれで高い所の全てが怖いのでは。いや、それを狙っているのはそこに居るそいつだけ、そいつの鋭い目付きだけが、ただ一箇所の高くにじっと棘棘と歪に浮いている。そこに潜んでなど居ない。隙あらば躍り掛かって、その有るままの姿を晒したくて、荒い息遣いを押し殺しもせず、熱い体を揺らし、うずうずしていないか。尤も、その

方が遣り易い。隠れたままでは、何か途轍もない怖い奴が潜んでいるとだけ感じられ、身動きも取れず、呻きながらそいつの餌食になるのを待つしかない。正にそんな風に直ぐ目の前に、得体の知れない奴に気を病んで息も絶え絶えに臥せっているのなら、それを助けるしかない。いや、それはどうしても助けなければならないただ一つのもので、出来たらそれに、怖いものの姿を教える事から始めるべきだが、とても無理なら、その周りの頼りになる奴と力を合わせるしかなさそうで、その臥せっている脇の空いた辺りに助けを求める己の姿を晒そうとして、やっと気付くのは懐が寒い事で、届けなければならないものは、臥せって熱を出して微かに草の根か土の匂いさえ香らせる体の中に有るかして、だからそいつだけが狙われているに違いない。そう思えばもう、そこから遠く離れ、高いも低いもない所から、遥か先のその危うい場面をぼんやり眺めるばかり。で、その眺めるのは何かと自らを省みれば、それは懐に守られている筈の温かいものだけで、体はと探しても見付からないなら、遥か先との距たりの何処かに、粘る泥のように伸びているとでも考えるしかないが、取り敢えずは、元の低いだけの所へ戻らなければ、温かいものは、何処へ届けられるもなく、漂うばかり。そうして更に後退りを続けて、低くへ低くへ降りて行けているようでも何の手応えもなく、もう低い所へは戻れないなと諦めると、そうしている間も、先との距たりのそのままの中に伸びていた体の内から、獣の息のきつい

い臭いを巻き付けた重く太い四本の牙と、たっぷり血を巡らしたような紅の硬くずんぐりした八本の爪が剥き出され、もう狙い澄ました獲物に躍り掛かって、しかし下には何が臥せっているでもなく、ただ己とだけ、奴は果てなく闘い続けるしかなさそうで、そんな己と言うべきか奴と言うべきか、そんなものなら放って置くしかなく、またこちらに戻ると、懐に守られるでもなく、すっかり温かさを失ったそれは、何か分からないままの何かに過ぎなくて、まだそれそのものを失っていないだけ増しと思えばそれも失っていて、それで却って、ずるずる後退りを続けた長い距たりを、全力で駆け戻る熱い力が湧き、前へ前へとぐんぐん身を乗り出すと、目ばかりが柔らかくどろりと溶け、それは黄色い嫌な匂いを後へ引いて更に病んで行き、病めば病む程、それに相応しい筋張った硬い肉が絡んで張り付いて、分厚い体が、先との距たりをぶち抜くように盛り立てば、その硬い肉の重なりに締め上げられて、両目は膿を出し切って点程に縮み、それに映るのも、点程に狭い中での、己とだけの血塗れの闘い。しかしそこへ、刃物のように鋭い匂いの膿が流れ込めば、点程だったのが、いきなり池のように平べったく拡がって、それに映る池のような拡がりの中に、古いやら新しいやらの数え切れない闘いが垂直に傾れ込み、しかしその平べったいせいで、闘いは訳が分からなくなって終わるしかない。闘いの終わりは、死ぬ事。かどうかは定かでないが、池のような拡がりに何の生き物の影さえ動かな

いのは確かで、そのせいでか、平べったかった池は、みるみる厚みを増し、高くへばかり脹れ上がり、そこから見下ろして目に何も映らないなら、それより低い所は全て削り取られて流されているのは明らかで、そうなればもうぴかぴかの金属のように逞しい体は、決して止められない凄い速さで先へ先へ突き進む。勿論、そんな体には付いて行けない。それが点程に小さな闇に溶けて砕けるのを見届けるのは、あっという間で、それを見送るのは、その懐に温かく守られていた筈のものでなければならない。それはそのまま、何の過不足なく、己の死んだばかりの姿に違いない。その姿がどれ程嬉しいか、嬉し過ぎてさっぱり分からないが、死んでしまったなら分からなくて構わない。と言う訳で、その必ず届けなければならない所へそれを運べた。で、話しが終われないのは、池の底に残された、池と同じだけの拡がりを抱える目の事。それは何から生まれたでもないなら、初めから死んでいた目とでも呼ぶしかないが、そこにそれしかないなら、どうとも呼ばれる用もなく、それより低い所がないだけで、何処へとも滑って行くのだけは分かる。ただ、滑る程にそれは、みるみる年老いて行くようでも、病を抱えて坂を転げるように弱って行くようでもありながら、それで却って、低い所のないその奥へまで、真下へと見て取れる幾つかの色は動いて、いや、そうである程に何も見えなくなって、目でもなくなり、池のような拡がりの底にこびり付く汚れに過ぎなくなって、どんな生き物も決して池

に棲まわせないための、命にだけ嫌われる薄い色でしかなさそうで。そうならそこは低いも高いもない闇。しかしただ闇にしては痛くてざらざらしているのは、そこへ、点の闇に砕けて散った体の粉粉の煌めく破片が振り撒かれたかしたか、池の拡がりは丸ごと濁り、そうして仄かに香りを立てるまた別の薄い闇へ昇るようにと池は消えれば、薄い色は、ただそれだけのままに、ある筈のない低い方へ揺れて傾く己の姿と遊ぶようで。ある筈のない高くを見上げるのも思いの儘なら、その己の姿には色も形もありはしないと思うのも思いの儘で、嘗て嗅いだ筈の微かな肉の匂いの姿を糧に、それをぼやけた塊にし、ぴかぴかにすれば、そのぴかぴかの他に何もない筈の外に、真っ直ぐ伸びる一本の太い木が、一際ぴかぴかと高くと低くとを厳しく分けていて、（二〇一四年四月二十二日）

（拾えてしまうものは必ず…）

拾えてしまうものは必ず汚い。拾わずにいても。拾えるものがなければ、汚いものもない。もの何も、拾えるものがないなら、何が汚いもない。それでどうやら、汚れていないものを抱えているなら、それを何処かで拾った筈。汚いも

のを幾ら拾っても汚いのに、それが汚れていないなら汚くないものを拾ったようでも、拾えたからには汚れていなければならない筈。拾えないものを拾ったなら、それは汚くないかも知れないが、どんな手を使って。実は拾ってなかったとか。拾ってなくても拾ったように、拾われなくても拾われないままに、それは届いてしまったか、でないなら、初めから直ぐ側にあって、何かを拾う恰好でもしてみたら、目の届く手元にまで、それは何となく取り上げられてしまったとか。でもそれもやはり拾ったのでは。だからそれはどう見ても汚い。で、汚いから捨てて済むでもなさそうなら、いっそ見なければどうか。見ないものは汚くない、と。でも見ないって何。見ないものが、その見ない所に有ると分かるには、多分そこら辺りにある筈と見当を付けるしかないなら、そんな風にでも何となしにでも見ているようなもので、そんな風にもしないなら、見ないものをどうやって分かるのかな。例えば空ばかり見上げ、出鱈目に脚を振り回し、運良くそれを蹴飛ばせた時にだけ、それがそれだと分かるとか。蹴飛ばせなくても構わないんだ、ただそう思えば。などと言う話しではない。そう思うだけで、そんな風にでも何となしにでも見てしまっているに決まってる。そうとも思わずに、だから、何故脚を振り回しているかも分からず、精々それが楽しくて已められない位の事で脚を振り回していたのでなければ拙い。そんな事してた覚えは？

なけりゃおかしいんだけど覚えある？

いや覚えなんて少し

もないままで。だって別に少しも汚くないものが、ずっしりこの手に有って、それを抱えてさえ居て、そんなもの、これまで全く見た覚えもないんだから。いや、見た覚えがあるかどうかも、確かめようもない。確かめたいでもない。で、脚を振り回していたのかも分からないが、分からないで構わない。多分蹴飛ばしたか何かなので。多分蹴飛ばしたか何かだけは、間違いなく確かなので。多分が間違いなく確かなのが分からないなら話しは進まない。進むからには分かるも分からないもない。他に何も分からないし。そんな訳で、その多分が間違いなく確かなのは、その蹴飛ばしたか何かなものが、見ないままのそれと言う訳だが、そうしてそれは紛れもなく、それを拾ったに違いない手で抱えられ、何処からどう見ても汚れている筈が、醜いばかりに見事に汚れの痕一つない。そんなものをすんなり抱え込める筈がない、何が起こったか。どうやらこの先の事で、そこへは、そこを出たからには戻るしかなく、ならもっと増しな事に出会したかったと足は重いが、拾えた分、足の重いだけより増し。かどうか知れないが、その知れないのは羽のように身を軽くもする。そのせいで身は幾らか温まるなら、凍て付く景色の乾いて僅かに縮む奥に、仄明るい風がゆるりと昇るようで。その風の僅かに届かない辺り、蹴飛ばされ蹴飛ばされ、それで怒るように熱く固まって狭い中をぐるぐる回る、形の定まらない何かの小さな欠片が、それに相応しいものを、激しく浮き浮きと待っていないか。勿論それは、

拾いようもないもの。するると羽を毟られたように身は重く丸まって、凍て付く景色は湿ってまたむくむくと、こちらへ脹らんで、それに呑まれるように、戻るしかない先で行き止まると、そこは全く、戻れただけ増しどころか、よくも戻れたと呆れる程で、風はなく、その残して行った仄明るさに囲まれ、何に出会せなかったも過ぎた事、蹴飛ばされてばかりの頃を妙に思い出したくて頭を絞る程に、まるで何も浮かばないのが痺れるように快く、拾ったも何も、そのぐるぐる回る欠片の熱さに溶けて、遠い風の音に吹き払われるようなら、その風の音だけ聞こえる辺りの更に奥では、蹴飛ばされたい誰かの、拾われるしかない方へ浮き浮きところころ転がって行く、汚れなど少しも厭わない新しい姿が、何度も消えては消えてはふわりと立つ。立つって何処に、なんて探すから知れなくなる。探さなかった事にしよう、探せてもいないし。でも新しい誰かの姿なんて、有りそうにない。新しくても仕方ないし、誰って事もないなら、ふわりと立つのは消えても消えても常に同じ姿。なら少しも消えてなんてなくて、蹴飛ばされるばかりの所へ転げ登って熱く固まれば、その熱さは隅から隅まで汚れていて、その汚れの塊が向かうのは、如何にもそれに相応しそうな、拾えてしまうものばかりが続いてのっぺり延びる冷たい景色で、それは分厚くなって汚れの他は何もかも呑み込んで行く流れのようでありながら、小さな石ころ一つ転がせない、その石ころの下に閉じ込められた、震えるともなく震える薄

い影では。そんなものはきっと拾えないだろう、じゃそれだけは汚れとは縁がないとでも。かも知れないが、そんなものはもう消えてしまって、ただその塊の熱い汚れが、足でも生えたかのように走り出す先は、拾われたものばかりで拵えた、だから汚いに決まっている、行き止まりの狭い所で、汚れを厭わない熱い塊には確かに相応しい。ただそこが近いようで遠いのは、その塊の走る力の弱いせいで、もうそこら辺りに倒れ込んで拾われるのを待つしかない。そうして拾われるのは何。もう少しも熱くない。だから塊でもない。拾われてみても、汚れているかも分からない。ただそれが何処へ行きたいかは分かる。行き止まりの狭い所。そこへ辿り着ければ、そこでは拾われたものが絶やさず燃やされ、その熱さのせいで、そこで遂に汚れは絶えて、汚れを厭わないのもお仕舞いに出来そう。しかしそれは、ほんの瞬く間で、その瞬いた後には、何を拾えようが拾えまいが何もかもが汚い。しかし却って汚いなんて何でもない。厭うも厭わないもない。さてそこで考えてみるに、何に蹴飛ばされて来たのだろう。蹴飛ばされ蹴飛ばされ、それで熱く固まって、見上げられもしない空の果てからこの身が出来たのなら、蹴飛ばしたのは生みの親って訳か。いやそんなものの居る筈もなく、何故居ないか考えてみて真っ先に分かるのは、そんなものは抑も何処にも居ないし、自らもそんなものには成れない、と言う事。何故なら、ただ拾うしか出来なくて、拾えてしまうものを持ち帰っては、それらを

燃やすために行き止まるしかないから。そして、そうでない事のされているのを見た例しもないから。いや、見た例しがないだけでは怪しいが、怪しいと言うなら、風の残した仄明るさで。風の音なら拾えても、仄明るさばかりは拾えない。で、それが汚れているかいないか、吐き気を催すばかりに分からない。勿論、何を分かろうとしようにも、行き着く先には吐き気を催すばかりの分かり難さしかないのは知れている。しかしその行き着く先にさえ、仄明るさは少しも褪せずに曇らずに、何事もなかったかのように、そこを囲んでしまわないだろうか。それなら、その仄明るさに蹴飛ばされたか、蹴飛ばした奴の成れの果ての姿が、その仄明るさか。そうとでも考えてしまおう。すると何を抱えているか分かる。兎に角何とも似ていないもの。汚れているでもいないでもない。それで汚ればかりの中を絶えず擦り抜けてばかりで、却って汚れの中にするりと留まって動かずに、燃やされ続けるものの側で熱くなって、拾われても拾われても決して拾われる事では汚れはしない。なら、そいつはもう疾っくに、吐き気を催すばかりの、遠い風など決して届かない、もっとずっと遠くに行ってしまったに違いない。しかしそれは、ほんの瞬く間どころか、その瞬く間にもそれは引き返して来て、それを囲む仄明るさと共に、光り輝くばかりに汚れの痕一つなく醜いばかり。厭おうにも厭いようもない程に。ただそれはもう決して拾われもしないので、

（二〇一四年五月十二日）

（花の旨さを…）

花の旨さを一度（ひとたび）知れば、命の水も舌を転がる限りは、ぱさぱさと水臭い。花の味こそ比べようもない命の源、そう思えて仕方ないまま、水を背に退けて、花の泥臭く温い風の中へ身を潜めれば、もう食べられるのは花の他にない。そのとろりとした厚みは他にない。ほんの今摘まれた花、草の匂いとは切り分けられ、僅かに腐り始める色も滲ませ。その花は何処。匂いなら確かに香り、花弁の揺れる音もあちこちでチカチカと響くようでも、口に運べる花は何処。別に匂いや音に誘われて来たのではない。屍を迎えなければならない花を当てにしての事。生きるためには殺すしかないか、そうでもなくて殺さなくても生きられるが、ただ殺すしかなくなれば、他に目に留まる何も見当たらず止めようもないなら、生きられるも生きられないもなく、そうするしかない。生きる中に、殺す事が紛れるのは避け難い。避けられるのかも知れなくても、その遺り方を知りようもない。そんな訳で早速、擦るように抱き付いて、溜まっていた力を隙なくたっぷり傾けて息の根を止め、音一つ立てずにじっと血を啜り尽くして、その乾いた屍をこれ見よがしに晒すなら、それへ捧げられるの

は花しかない。常にそう、なので花の旨さも、崩れて楽しく可笑しい屍をぐるりと眺めながら、心置きなく味わえた。それともこれは、まさか、こちらがそうとは知らぬままの、何かの決まり通りになくてはならない生け贄。そうなら供えられるべきもので、それへ花が供えられる訳もなく、花の来ないのも尤も。誰も為たがらない殺す役をまんまとさせられただけで。殺しの手際良さを見せ付けた積もりが、その在るべき所まで求められた屍を運んだだけ。そうしてそれは川へ投げ捨てられ、何処かの岸辺へ打ち上がるなら、そのまま腐らせるのが理、何時もの送り先へ届けられるもののように、さもこれ見よがしに。しかしそう決まったでもなく、屍が招く筈の花への心残りは絶ち難く、共に川を下って来たものの、それを巡ってのたくるばかり、腹の空く余り、温い風の中から、透き通った泥水のキラキラと絞り出されて舞い散るのさえ見透かせて、その泥水なら辛うじて啜っていられるらしいが、腹の足しどころか却ってそれで空きっ腹は愈愈極まり、腹の内の虚ろな震えの余りに微かで、我ながら命の為せる業かと恐ろしい。で、その震えは瞬く間に身を経巡ったかして、痛みの眩しくるばかりのような狭苦しい目の奥に落ち込んで、その見詰めるままの屍の余りにゆっくりな腐り方と互いを映し合い、震える姿のままにぐにゃりと固まってしまうようなら、屍へはもう指一本触れられず、か細く伸びてどうにも已まない、波打つような高い叫びを吐いて転がして、それを屍の干涸らびた喉

の奥へ向け、涙ながらの戯れのように息を吹き掛ける真似でもするのがやっと。いや待てよ、ゆっくりゆっくりな腐り方って。上っ面をぼんやり眺めて止まっているようなら、ゆっくりだなんて思えてしまうのかな。一皮剥けば物凄い勢いで腐って何処かへ流れ落ちているに決まっている。それなら或いはもう泥を含んだ風にさえ吹き流されてもいよう。目の奥の命の届かない程に微かな震えと映し合える、そんな虚ろなものがあるとするなら、音という音の行った切り戻って来ない、ひたすら音を殺して拡がる光りだけでは暗過ぎて、暗い余りに渦を巻いてただ狂ったように青いばかりの空。青空程、花を探して見付からない所もないなら、高くを見上げるのは何とも辛い。肝腎なのは花、花。「空になくても、花なんて崖にも石の影にも泥の上にも、きっと屍を捲った裏側にも咲いているじゃないか」なんて声はするが、咲くままの花なんて花じゃない、あれは己の種を拵えるために備わった、少しの狂いもなく良く出来た器。そんな命の業とは、きっぱり切り離されて花。で、声の主は誰であろうと、有りもしない花を有るように言い包め、花を諦めないよう仕向けているに違いない。いや違う。それらも紛れもなく花、それを見付けられないだけ、この屍のせいで。花は何よりも屍と結び付いてしまって。腹を空かすばかりか、それで屍より先にこの身をぺしゃりと崩して溶かして、さっさと流してしまいそう。静かに止まって賑々しく腐るのも、この屍のようには許されずに。叫び直す、そう一身に、

ちゃんと泣き叫ぶのから遣り直さなければどうにもならないよ。どの耳にも決して馴染まない、いやまるで聞き取れもしない、喉が嫌でも振れて溢れ返る汚物の腐ったような泣き声を、屍の周りを塗り固めるように吐き出して吐き出し、屍がすっかりその泣き声に浸されるなら、それでやっと花と屍とを切り離せそうで。すると泣き声に塞がれ沈められ、ゆらゆら泳ぎ始めるような屍は、まるで花を欲しくて呼ぶために前のめりにも腐ろうとするかのようで。窪んだ目の穴が鈍い光りをとろりと溜めて盛り上がり、空の青を映して濡れるようなら、それは花弁へとふわりと注がれたい涙では。あやふやなこの身の足取りに居たたまれず、助け舟を出そうと思わず立ち上がるようではないか。と、その今一息での立ち姿は呆気なく崩れ、更に楽しげに惨めに形を失った屍は、と言うよりもう、塵塗れの腐った肉片とばらけた骨片の危うい繋がりは、拡がりながらその角角の向く先に、それぞれに花の尖った匂いを嗅ぎ付けていて、その一つ一つが際立ってまるで混じり合わないので、却ってどの花へも行き着けないような。そのどれかを試みに千切って花に見立て、食えないのは仕方ないにしろ、泣き叫んだだけのものは手に取れたとも思えそうで。しかし勿論、手に取って終わり。その手の方が先に溶けて消えて、身は影とさえ切り離されて何処へ向かうか。ただそうなれば、腹を空かす苦しみなどは忘れられ、替わりに腹へは収まりようもない桁違いの苦しみと取り組まされるにしろ、桁違いな分、ただ

苦しみばかりで気は楽かも。その気楽さの甘い味なら、花より旨いと思えるのかな。そんな舌では、身はまるで蕩けた影。影と切り離された身はまた影か、元から影か。影も水を泳ぐなら、その含む水だけの重みと厚みと動く力とを思うままに活かせた果てに、花の姿を味の極みに置き換えも出来て、それでそこにそれをそのように殺さずには、身が持たないのはその通り、うっとり執濃い眠気を堪えて渋渋と凭れ掛かるようにでも。その獲物が一体何の生け贄に成るのだろう、何の決まりも嘘を承知の嘘ばかりで。嘘が終われば、その先に嘘のないのは急かされるように腐るしかない屍の様が証していると、恐らくは声の主らの目には映るなら、そうならそれで知った事ではない知れた事。花の旨さだったものに導かれるしかないまま、この苦しみの一切が途切れず拡がり已まないのなら、他に知れる事などないのが、元からだろうが改めて映し出され、それを明明と映すしかない、屍を囲む水を含んで泥程に重い光りに、間違いなく押し潰される身の、その光りの届かない方へぬるぬる流れて仕舞いそうな心地良さは、花の旨さを失って余り有る。かどうかは怪しいどころか、そんなの嘘だね。「花なんて要らなかったんだろ。だってお前の命が要らなかったんだから。」「じゃ俺に殺された命は？　俺に殺されるためには、なくてはならなかったじゃないか。」すかさず次の「ん俺って？」の声は、何の問いかと探るように辺りを見回す内、何の肉片も骨片も泥と分かてず蹴散らしてしまったかで。

屍は終わり、その為し得る全ては為されたろうに、探しようもなくなれば、さぞ寂しいのかな悔しいのかな誰かには、などと思い入れは決まって間が抜けて、或いは、知れなかったかも知れないものが、ふと現れたとすれば、きっとそれが屍の終わる姿。それならそれで、現れても現れたものは直に消えるのに触れられて、その終わるまでの間にしか何であれ極まりようはない、なんて吐き気もしないよ、そのままでは。それに耐えられもせず吐けもせず、それを堪えるのをただの眠気と間違えそうでも、払える眠気なら繰り返し嘘が運ばれるように易々と、いや嘘が嘘なのが必ず嘘に決まっていて、ならそれは運ばれようもなく、（二〇一四年六月六日）

（四つと言うのが…）

四つと言うのが初めからでは、どうだったか。それとも一つでどう、二つでこう、三つでそうと来て四つ、などと、今更でもない。それでもやはりその初め、四つも数えはしたろう、一つから。数え方、その数えた奴が悪いのか悪いんだ、でもそいつ無しには始まらず、だったら始まらなかったが増し、なんて言葉の遊びに決まっている。決まっているから逆らえないと決まってもいない

が。なんて立ち止まればもう、それで逆らっていたり。ただそんなでは、何も起きない事しか起きないけどね、でも何も起きない事は起こったぞ。そんなの決まっているんだよ、そこまではきっと。決して逆らえずに。で、四つが何を遣らかしたかなんだけど、それは、そこに持って来られるものを持って来たのかな。そう決まっていたかのように、四つばかりでは何かを造れる筈もなく。で、持って来られるものと言って、煙のようなものしかないだろ、ただ四つばかりでは。「のようなもの」はまどろっこしいから、ただ「煙」にしてしまおうか、なんてしなくても、煙になってしまうけどね、それがまるで煙なんかじゃなくても。肝腎なのは、さてその煙とやらが何を遣らかすか、いや遣らかしたところで、どうって事無い、だって、ただ四つが相手では。なんて高を括っていては置いてきぼりだよ、もう何処かに沈んでるんじゃない。四つはゆとりの遥か遠くでは、そこから何が見上げられる。沈んだなら水の中か、でも息はたっぷり出来そうで。それなら楽しい。楽しければ、どんな事も終わりまで考えられて、それをぴったり憶えて居られる。その憶えて居られるかだよ。終わりまで考えるのなら辛い毎日でも出来る繰り返し、遣り方さえ心得て。でも、それを誰にでも話せる位、ちゃんと憶えて居られるなんてそうはない。けど、あるんだよ、楽しさを脅かす小さな棘一つもなくて、それをただ嬉しがって居られれば。で、そうなんだろ、違うの。そうか違うか分からないならもう、分

からせるものが遣って来ていて、耳の尖ってしまう足音か聞き慣れない話し声ならば届いていて、遣って来た奴の耳にだって、こっちの水を掻く音位届いていなければおかしい。そいつの持っているものなんて知れてるからね。少なくとも煙は知らない。で、そいつ何が出来る。ただ殺して食って寝るだけだろ。殺したいものの他の声も物音も、耳に届いても聞き取れない。しかしどうやら二つらしい。一つは一日殺すばかり、でももう一つは、水の周りを巡っている。そりゃそうだ、殺すばかりで食い方が分からなければ、分かっていても出来なければ、飢えるばかり。別に水を巡れば楽しいからじゃなく、偶偶そこに、殺してから食うまでを繋ぐ何かが落ちているのかな。でもそれをたっぷり拾えたにしろ飢えないだけ。いやそれだけとも限らないぞと、その一つと一つで二つはきっと、話し合っている。水を巡る片方には聞こえて、もう片方には聞こえない声か物音について。でも草臥れるだけ、片方に聞こえて片方に聞こえないのはそのままだから。となれば一つがもう一つを導いて、その声か音の方へ突き進む。その甲斐あって何処が水かも構わずに、水を獣の皮を裂くように破って、その隙間から二つは奥を覗けば、狭い中一杯の窮屈そうな影が、ぶくぶく泡を噴くように、小さな光りの玉を産んではいるらしいが、その行方は、何処か、のっぺり平べったい方。産まれて来るのは光りじゃなく、それらに促されて渋渋引き出される細長い影。影から影が産まれれば見えない筈。でも、そう

と分かったのは、産まれたばかりでその影はもう、話し始めて止め処なく、息継ぎの音もない。水を破った奥がまた水なら鰓で息をしているか。「ってまた都合良過ぎてお気楽な。水が破れるものか。長くなるから端折るけど、ま、君らの言い方なら、光りと影を貼り合わせたようなもの、それを断りもなしに破るとは。さっさと塞いでよ、続きはそれから。」なんて言われても塞ぎ方の分かる筈もなく逃げるばかり。それでもやはりどう見ても水の、その破れ目に背を向けるばかり。するとそれでまた、二つの前の方へ回り込むのは、更に渋渋引き出されるらしい細長い影だけど、そうなると影どころか、ぐりぐりと丸みを繰り出して止まらない光りの一塊、その膨らみそうで膨らまないどころか、身を削るような身振りで言うには、「他でもない煙の事、二つ有るんだよ、三つかも知れないけど。一つは直ぐそこ、もう一つはずっと遠くに見下ろせる、見下ろせるだろ、見えないのかな、ま、いいや、そっちの煙は後回し、どっち道、何れ避けられないし。先ずはこっち、こっちの事はその色を教えられるんだ、幾ら転げても決して水に削られない硬い石のように憶えているから。まどろっこしい言い方はうんざりって顔、ふん。でも分かったろ、殺すばかりが能じゃない。」言われて確かに、煙のないせいで、殺しても殺しても足らないものばかりって気はして来たかな、全くそんな気はしない気もしながらだけど。ならロから出任せ、「煙は知っていた。暗くなれば灯りを点すと同じで、もの

が消えれば、煙。灯りを点さないでは、ものとも知れない。煙で何の形も決まる。」「良く分かってる、四つから学んだね。」学んでなんかいない。寧ろ四つに持って行かれた、ものの形を全て。煙を独り占めされたんだ。「でも四つのものだもの煙。当たり前の成り行き。ならやはり学ぶしか。でも奴らは教えようともしない、だって四つだから。四つは一つだから。互いを見合えば四つは必ず一つを分かち合う。罰点の真ん中で一つ交わる形。暗くなれば灯りの喩えは良く出来ました。煙無しには、四つを見上げるとだけは分かっても仕方ない、為す術ないでしょう。今日はお仕舞い。」さて今日が昨日の明日の今日になって、裂けた水も跡形無く塞がって、二つの前に一つが加われば三つ。三つは互いを幾ら見合っても、三つのまま決して交わらない。なので、煙の事でも何でも話せる、知らない事は何でも訊ける。で、煙って何だっけ、のもう、だっけ、が煙かな。残るは、煙って、と、何。何が何かは三つの内の一つが知っていて、それを二つに初めて教えれば、二つは熱く燃えるように真っ赤、きっとそれまでの知らない故の誤りでも恥じて、それで喉が渇いても、水に映る赤い姿が水に立つ炎の形では、顔を背けるしかなく水に口は届かない。なら二つは、それを辛いかに踊るしかない。でも知らないんだね、踊り方。待ってました、三つが互いを見合って三つのまま、それが囲む三角の虚ろに、煙が立つ。立てばくねくねと囲みを跨いで、もう踊りの真っ最中。水の上を水より軽く思いの

儘。三角の三点は、次次にくねくねと炎を産んで、それらは地の果て目指して、拡がるのは勢いばかり。勿論実は、目指すは地の果てな訳はなく、煙。「そうだよ。そうして、」炎を産んで煙を目指せば、三角の中の煙なんて絵に描いた煙で、その虚ろが目指す高みがそのまま、炎の目指した煙の姿。でもそれだけではね。その煙を火種のように懐に抱いて、踊るのと同じ気儘さで、伸ばしたり縮めたりも出来ないと。そのための器も手に入れないと。それにはさて今日が明日の昨日の今日に戻って、やはり水。水からしか何一つ造れないよ、でもどうやって。やはり四つにお出まし願う、ってまさか今更。なら三つから一つ離して二つに戻せば、どう。見合う二つは、見合う度に互いを揺らめかして、まるで水。それでしかも踊りを覚えたんだから好き放題、もう好き放題とも分からない位。煙と交わって踊り放題、まるで産まれ続けて已まない炎の輪っか。さあすっかり四つのお株も奪った。真っ青だよ、高みに放り上げられたまま四つは。で離れた一つ、だからって何て事ない。だって一つなら、水の奥を何処へでも巡って、きらきらと煙塗れの二つを偶に眺めては、何を思う事もない、せっせと水辺暮らし。煙って何だっけ、なんて、二つに死ぬまで考えさせておけば。一つに比べれば二つの方がきっと死に易いし、死ぬなら何か分かりそう。そのために二つかな、と、恨めしそうで青い四つと、もうその青の光りを受けなければすっかり暗い一つが何処かで繋がって、二つにする仕返しは、（二〇

一四年六月二十六日)

(数で何がどうって…)

数で何がどうって？思い込みだよ。悪い癖程、直らない。数から逃れられないのは、そうだけど、でも数がそうするんじゃない。渋渋と、数は数になってしまっただけのもの。初めに数えた奴なんて居ない、一つの他には。渋いも甘いも分からない内に。「一つは数えられた。」とまあ括弧は付けておくけど。その一つを数えた奴が一つ、と言うか、数えた一つの振りが出来て一つ。そう数えてしまえば、それからは一つも数えず、ただ数えられない振りが一つ。そんな一つなんて、見向きもされない。でも見向きもされない事からは、目は離せない。で却ってその、うっかり見向きもされない方を向いてしまったら、見向きもされないその一つまでも見失う。目を離してしまった報い、仕方ない。で、一つすら消えて、なら、何もない。ような、何でもあるような。なんて呑気に構えてはいられない。数から、取り分け見向きもされない一つから逃れられないのは、それは何時もで慣れたもの。でも一つすら消えて、でもやはり逃げるしかないに決まっているなら、何からどう逃れようとすれば間違わず

に済む。一つ間違えば命取り。ひしひしと伝わって来ないか。いや何も来ない。来ているかも知れなくても、その、かも知れなくても、がどうにも珍しくて、浮き浮きと楽しい。で、何の事もなく、その楽しみもやがて色褪せ、ふわりと一つの向こうへと消えれば、それでまた、一つは見向きもされないで、何が消えたも消えて消える。でもそれで、どう仕様もなく恐ろしい一つから逃げられた、浮き浮きと。でもそれで済むならきっと、後はずっと眠るのが仕事。どう仕様もなくはないけど恐ろしい奴は、もうその浮きの中に、すっかり我が物顔に居座って、でもそれだけならどうにか出来そうだったんだけど浮き浮きとでも、浮き浮きが何時の間にか沈んで、奴に抑え付けられて、もうどう仕様もないような。どう仕様もないとは言っても、逃げようとは考えられて、諦めなければ隙はきっと見付かって逃げられる。で、見付かった隙に走り込んだんじゃないかな。すっかり逃げられたかどうかは分からなくても、奴に抑え付けられていないのは確か。でも何から逃げられたんだろう、奴も一つだったんじゃ。なんて事はもう考えもしない。だってもう逃げるなんて忘れて済むし、数から逃れられないの、逃げるしかないに決まっているのなんて、思い出しても笑える。それにもう、一つに煩わされないので、全て思い通りに成るように成って行く。また有り触れたあれこれに、ふわふわと慣れて行くだけ。でもそうじゃない。有り触れたものに慣れるのは慣れたものだけと、もう何一つ有り触

れていないんだな、そこでは。暫くは、そう分からずに居られただけ。一つに煩わされずに居られる訳がないって、分からずに居ただけ。奴が一つだったかは、どうかな。恐らくは、一つじゃなかった。でもどう仕様もなく恐ろしい一つからは、奴もまた逃れられては居なかった。恐ろしい一つから逃れられたのは、そんな奴の御陰ではあっても、でもそれで却って一つから逃れようもなくなった。ま、どうにも逃れようはなかったんだね、初めから。それで何がどうなったかと言えば、ここまで一つが入り込んで来て、そこから何と二つ！を作り出してしまった事。ここにその二つが出て来てしまったんだから、そうなんだよ。二つなんて、また幾つにしろ数なんて、決して何処かから出て来たりしない。初めに言った通り、数は数になってしまうだけのもの。一つから二つが出て来てしまうって何。いや、一つからと言うのも果たしてどう。いや、抑も二つって何。決して一つじゃないもの。一つと一つでもないもの。幾つから幾つを一つ一つと差し引いて二つでもないもの。ここに、初めから二つ。棘棘していてギザギザしていて重たくて熱く濡れていて妙に小さくてすばしっこくて、目を離せば直ぐに何処か暗い冷んやりした方へ二つして連れ立って、音も立てずに何をしているのかと思えば、泥塗れのぬるぬるの顔で血腥い獣の息を吐く、腐った根っこのような匂いを体中からぷんぷんさせたまま、こっちへ来いとぎょろぎょろした目付きで尖って硬そうな肩をずりずり寄せ合って頻りに誘って

来る。そんな方へどうして行ける。だってそっちは、一つ間違えば命取りの、どう仕様もなく恐ろしい一つの方だよ。幾ら言って聞かせても、って、言って聞かせられてたかも怪しいけど、二つは全く何処吹く風。そんな内に、とうとう二つに疎まれるような事になって、それでもそんな二つに目を掛けて居るしかないからには、独り、二つに疎まれた身に始末を付けるしかない。いや二つに目を掛けるなら、独りでもないんけど。いやいや二つに付き纏われたりするから、始末を付けるしかない独り身で。でももう、そんなこんなの考えに始末を付けるまでもない、何一つ元に戻らないから。と言う訳で行き着く先は、どう仕様もなく恐ろしい一つ。いや、恐ろしいはもう要らない。そこへ行くのが抑も独り、つまり一つなんだから。一つなんだ。これが一つ、初めて手に取れた。恐ろしかった一つって、ありゃ何だった、って具合に。で、これは一つ考える値打ちもありそう、何だった、あの一つ。あれは色色姿を変えたりもしたから一つじゃなかった、なんて言えない。だって、一つじゃなかったと言えない位、それだけで、どうにも離れて一つだったんだから。そんなものは何処を探しても一つしかないし、何がどうでも動かない。で何。それっきり。これに何の考える値打ちがあるのかな。でもそんな、考える値打ちが何処にあるかさっぱり分からないから、他とはまるで違って、見向きもされない一つ。って考えれば、それが何とか値打ちかな。で何。それっきり。ならまたあの厄介な二

つに考えが巡っても、疾っくに二つは何処かへ行ってしまった。二つにすれば、こっちが何処かへ行ってしまったんだけど。でも、一つから二つへと繋がる筋は引かれたような。尤もそれを辿って見付かるような二つなら、それも一つと同じ、で何、それっきり、なのは知れている。でもそれが知れているのは、中中巧いかも。一つも二つも、それっきりと知れてしまえば、それっきり。後腐れなし、はい、さようならって。するともう何処も彼処も二つで溢れ返っている。そりゃそうだ、他にどうも成りようもない。こっちはもう、草葉の陰に隠れるしかないって寸法。そこで初めて二つをまじまじと間近に眺められる。で先ず気付くのは、二つは少しも同じじゃないって事。一つと一つで二つじゃない。例えば、この一つは、あの一つとその一つが混じり合って一つで、もう一つの一つも、あの一つとその一つが混じり合ってはいるんだけど、それはまた違う一つに、どう仕様もなく成ってしまって、それで二つって事。で、それと別のそっちの二つも、一つと一つが、あれこれの一つが混じり合って、違う一つと一つになって、それで二つ。でその二つで一つと二つで一つが違う二つ。待てよ、見覚えあるよね、これ。どう仕様もなく恐ろしい一つと、逃げたいけど逃げられなかった一つ。それって二つ。なら、その二つが混じり合って、そこから違う二つが出て来るって、すっかりそのまま。ずっと同じ事な訳か。うーん、でも何処か全く違うような。その違いが、また二つを作り出していたり

して。と言うのが、概ね行き着く所かな。後はきっと堂堂巡り、心残りでもあるにはあるけど。いや、その草葉の陰の心残りが曲者だよ、だってこうしてだらだら喋って居られるのは、そのせいに違いないからね。で、はい、さようならと心残りも二つ並べりゃ二つだよね。並ばないのかなこんなもの。ならそれだけの事。で何。それっきり。ってさせないのが心残りって事で、一つでも二つでもないのかな。ならとても楽しそう。だって、はい、さようなら、に浮きと、はい、さようならと、それっきりにならない方へと、で何って、（二〇一四年七月七日）

（陽を浴びる屍は…）

陽を浴びる屍は、石ころでも構わないが、山から海まで一つの風に見晴らせたなら、その前に据え、それらへ或いはそれらの向こうへ、同じ事をただ言い続けないと。屍が言わせているに違いはなくても、ただその事を言い続けたくて、陽を浴びて乾いて夜露に濡れる屍は石ころでも構わないが、強いてそれをここへ据えたままにしている。それは知らない事でなく、言い続けたければ何処でも何時でも思いの儘だったが、この屍をここへ据えてでしか、雨風に削ら

れる屍は石ころでも構わないが、もう言い続けられない。そうして遂に何を言っているか分からなくなって、まるで知らない事を聞き覚えのない声で繰り返すばかりで、そうなら、言い続けるのを止めようもない、と分かれば、声は見る見る太く脹れて汚れ、どろどろと垂れ流され、それがまた何処から湧いたか見覚えのない汚れを切りもなく呼び寄せて、見渡す限り汚れで埋まって何の色もない。高く霞む山、遠く霧を吐く海は別で。風は断たれ。「知らない声を止められないからってまた図に乗って。何か語ってはならない事を、語ってでもいる積もりですか。腸が混ぜっ返るまで同じ事を繰り返したって、言葉は少しも変わらず少しも汚れたりしませんよ。望みは何ですか。」望みはそのあなたの声、きっとそうだ。だってもう、屍はどう見たって石ころだし、石ころは屍でしかなくて、すっかり屍の石ころの石ころの屍は、長く温い陽や冷たく甦っては途切れる風で身を装っているので。いやそうなのだが、そうであって良いかはまた別。良いと言うなら、その声を、その一声だけで、生まれてからの初めの一節と出来る程に活かせる。良くないと言うなら、醒めた夢の取り戻せないように、その声は再び聞けないまでに隔てられた。もうそこを、とは、初めからこことは切り離されていた山から海までの見晴らしを、まるで別の何かとして後にするしかない、と言うか、後にする支度をしなければ、他にする事がなくて、空の動かない高さに身を刻まれるようで居たたまれない。支度が進む

度に、その済んだ支度に押し退けられるように、転げるようにそこを下った。するとそこが、それより高くへ行けない程に高かったと分かる。見晴らせた山など全て、一筆書きにでも描かれた薄っぺらな彼方。などと決め付ければ、首を捩るように振り返るしかなくなって、すると山は、幾世代かで道さえ開けば、歩き着けるように所でもありそうで。海は跡形もないな、と海のあったらしい方へ顔を向けると、またあの声が、薄絹のように顔へ降り注ぐ。どうせさっきの繰り返し。「まさか。繰り返しても言葉は少しも汚れないと言ったでしょう。望みはそんな事ですか。」そんな事？「そうして、決して再びその前には立てない見晴らしを後にする。むくむく透けた翼を生やすように。翼を知らないのですか。それで何処までも行けますよ。」と言って、海から山への見晴らしの外へ出られはしません。」そうか、山から海じゃなく、海から山なら、海が跡形もないなんて嘘はぷんぷん臭う。でも、翼のするのは決まって隔てる事だけ。その不意打ちにどれ程の目に遭わされたか。おや、声が返って来ない。声に生える翼が何を仕出来すか、声は漸く思い知って、それに従うらしい、透けて。と、伸び上がるように、その遠い方を眺めれば、さっきからずっと、疲れ知らずの広い翼に囚われ、山から海も海から山も見晴らせない所へと、息をするのも儘ならず、風より強く運ばれていないか。それを幾ら嘘と思い込んでみても、その嘘が、どんな嘘でないものより、大きく速く、ゆっくり荒い息遣いで、現れ

る景色を手玉に取ってどろどろに腐らせて流し落とす先は、さぞ禍禍しい林の冷たい奥かと思いきや、静かな当たり前の狭く落ち着いてのんびり遊んでいられる明るい所。山も海も見晴らせないなら悲しいか、のんびり遊び続けられるなら楽しいか。二つが少しも繋がらなくて考えようもない。答えをきっと出してくれる、その糸口位はきっと掴ませてくれる、その誰かを待つのが遊びかな、どれも。そのどの遊びもが終わったら、誰かが来たんだ。その翼が飛べた一つの風の目一杯の拡がりを知らせに。知れたなら、その拡がりの端から端までを歩いて行ける。ずっと乾いた土に目を落とし糸を手繰るようにして、その歩き着けた所行って、何て騒騒しくて落ち着きがなくて、狭いようでも何処へも繋がって、だから切りもなく広く、そんなこんなに急かされて遊ぶゆとりなど少しもなく、そこに留まるべきでないなら、ただ真っ直ぐ高くに開ける方へ。上って行くしかない、そこをそうさせてしまう重い石ころを背負って。そう、分かっているさもう、その石ころが屍と。でも口を噤むのは、あの翼がまた来ないとも限らないから。翼も石ころでは、硬過ぎて大き過ぎて爪を立てられないから。しかしもう翼より高い。翼は暗くてガサガサしていて黒黒と血の激しく巡るように波立っていた、下から覗き上げれば。それが見下ろせば、何て陽の光りを受けて様様な色に輝くか。いや輝くならそれはもう光りの陰にきらりと消えて再び空へは現れない。これらを、もっと具に言葉に移せば、さぞ語っては

ならない事を語れる気分になれるだろうな。そうしないのは気分どころじゃないから。もっともっと語り洩らしてはならない事が数知れずあるんだ、何も知れないままに。そうだ、翼を知らないのですか、と言われた事が、今、少し分かった。それは翼の事だからだ、それよりは分からないが。そりゃそうだ、この期に及んで何の翼か翼なんて知れている、分かり切ってるじゃないか、山と海の色程に。いやどちらも風の色。山も海もただ空っぽな拡がりで色など着いていないかな。「と見える山と海には、風も光りも届かない色で溢れていますとも。何を見ているのでしょう。見えるのなら見えるものだけ見て見ましょう。」いや何も、見るものなんてない、初めから。そこであなたが、お前には何も見るものなんてない、と頷けば。でもきっと頷かない頷けない、こんな自分のせいだ、と言うより、これらすべての、数知れない語り洩らしてはならない事のせいだ。「知らないのはお互い様、あなたの知らないだけの事を、私も知らないでしょう。その何を知らないかも知らないで。それならあなたも分かるでしょう。」でも見て取って測る事は出来る。どれが速いか遅いか何処まで足を伸ばせたか引き返せたかって。でもそんな事で何がどうなる。いやそんな事が何もかもを決めて来たんだ、はっきりと色の名もその境目も。色に名前だの境目だの要る訳ないだろ莫迦らしい。だからこうして上って行くんだ、重い石ころを背負って。おや何も背負っていないぞ翼の他は。翼が背負うものだっ

たとは、やれやれこんな所で思い知らされて、しかもやけに乾いて湿って重いとは。それでああやっと分かった、背負わなければならないのが、ただ屍ばかりだと、ずっとずっとそうして来たのに。それで終わりかな、この話し。言い続けなければならない事も何もなかったって終わり方、悪くはないけど終われるなら。でも終わりになってないとはね、何も。どうして頷いてくれない。誰の何のせいだろうと、ただ頷くだけなのに。ふん声が、また返って来ない。その返って来ない方へなら、屍を背負って上って行けるだろうよ、重い足取りもさぞ軽やかに、なんて嘲られて。だって背負っているのは何処が翼か見る影もない翼ばかり。ほらほらまた、って言うより、奴らはずっと後を従っていた。何処から湧いたか見覚えのない汚れを身にこんもり纏って、汚れが汚れを呼び寄せるので列の終わりも終わりでない楽しい奴ら。取り柄は何を遣っても姿を隠せるところ、ただ汚れの他は。汚ればかりは切りがない、翼を背負うなら仕方ないが、どうって事もない。だって数えれば数えただけ汚く増える色の名前にでも言い換えれば、汚れはさぞ極彩色のそれに相応しい名を与えられる、なんて嘲られて、翼なんて知らない風に頷く値打ちもなくからからと頷かれて、

（二〇一四年七月二十二日）

（殺して欲しい…）

　殺して欲しい、もう他にないって言うそれを、殺すしかないって、そうなってしまうのはどうして。空は光りの源、それだけは守らなければならない、それならと空ばかり眺めている奴。木は守らなければならない、その奥深い枝振りを、それならと夜も昼も木ばかり眺める奴。他にも、そんな言い草に明け暮れする奴らは溢れても、そんなそこら辺りは眺めずに、ぐさりと目の真っ直ぐ奥でも見据えて、殺して欲しいって。で殺すしかないって、他に何もしようもないし、しようとさえ出来ないとは。言われて逃げられないのはまあ、命の居場所の狭いと言って、ほらそこからそこまでと直ぐに指差せて、指は然程も動かないんだから仕方なくて。空や木を差し巡らす指の大きな振りとは大違い。空や木へ逃げる振りなら幾らも出来ても、ほらそこからそこまでの、ぞっとする程するりとした間には、逃げ口などない。ぞっとするだって。いやぞっとするのは、殺すしかないって他に思い付けないからだろ。その思い付けないのを、ぞっとするなんて言い換えて、逃げてるんだよ、じゃ逃げられたの。だよ、ぞっとする奴らなんて、皆もう知らん顔の空や木の向こうで、せっせとその日暮らし。で、そうなってないのは、ぞっとしたところで少しも何も済まない、ほらそこからそこまでの間から、決して動けないから。殺して欲しいって言う声

を聞き流せない耳を、とはつまり、その声だけが、ほらそこからそこまでの間なんて素通りし、真っ直ぐ届いてしまう耳を隠せもせず、その耳の向く方を向いて、その耳の言いなりに手足を動かすしかないのかな、なんて思ってしまうから。で、水の涸れた何も見付からない辺りを、何を待つのか、のっぺりと抜けられないまま、膿んだ匂いを残す閉じたばかりの歪んだ溝のような谷底へと、乾いた石より硬く捩込まれて行くように狭い道を、ぐるぐると嘘に違いなく下って行くと、当たり前に川なんて疾っくに涸れているけど、高過ぎて見上げられない空から降りて来たような太い幹の大きな木の下に、まるで嘘に違いない丸い池があって、だって池なら水が溜まっているだろ、でも水でない程に粘粘で、風を拒んで波立つと計ったようにがさごそと糸を引いて、やっと辿り着いた疲れた足に纏わり付いて池の底へ引き摺り込もうとする。すると声が追い付いて来るのかな、殺して欲しい、時はないって。でもそれは、間違って谷底まで滑り降りた冴かも知れない、と思えば、声の抜け殻は、池を巡って空っぽな自らを草の中にせっせと埋め込むらしい。そんなの、頼まれなくったって殺すか殺されるかだ、しかも池の畔だよ。敵の思う壺の底に落とされたようなもの。池に呑まれたくないなら、ないよ、池ごと息の根を止めるしかないけど、池の息なんて知らない。なら待つしかないと待つと、直ぐに息は来ないけど、息をしているに違いない奴が池の水を捲ってその裏から重そうに素速い身を乗り出

して、息の根だぞって、粘粘した糸を巻いては解して、草の中の声の抜け殻を虱潰しに抜き取ろうと。抜け殻でも、黙って見過ごせはしない。いや声って何時も抜け殻、だからそれは抜け殻にしても、全く声としての働きをするんだよ、他に声としての働きの出来るものなんてなしに。それを抜き取られたらお仕舞い、だって殺して欲しいなら殺さなくちゃならないし、そう思っていられるのは、声が耳に届くままだからで、でもどうやって戦えば良いのだろう、なんて思っていると、どうやってどうやって、と言う声の抜け殻だけになっていて、それで草の中を逃げ回っているとは不甲斐ないばかり。見上げるしか仕方ない、こんな時は思いっ切り、じゃ空や木を眺める奴らと同じでは。いや空の木だの少しも目に入らない。そこは、棘棘と脹れた形の深い陰を蝙蝠の群れのように数知れずごつごつと吊した大きな大きな岩が切り立ち、その気になれば池一つ潰すなんて木の葉一枚裏返す風を戦がせる程に訳ないって脅し顔。岩陰一つ一つの奥行きから湧き起こる、まだ殺されていないものへ向けての、まだ殺されずにいるのを厳しく咎めるような止め処ない脅し声。そうだ、その岩の声の響くせいで、殺されるしかなく殺すしかない。でもそれ、分かってしまって良いのかな、分からない内に殺すべきだったんじゃ。なんて考えていても仕方ない、目を瞑って真っ直ぐ信じた方へ駆け上る駆け下る、それでもうそこへ行き着いていて、待っているそれを殺すんだ、殺したんだ。それでまた引き返すと、谷

底も池も見付からず、どうやらあの岩の、地平線など磨り潰したように仰向けにすっかり土に埋まっているらしいのっぺりとした所に突っ立っているしかない、その何故か知れないのを何故か居たたまれず。ざらざらと鳴る乾いた土の奥に、あの岩の脅し顔のままの静かな恨みの籠もった声の低く横たわるのが、酷くのっぺりと見えないか。土ののっぺりなんかより、ずっと冷え冷えと広く丸みを帯びて深くのっぺりと。きっとそこから、と言うかもう何処も彼処もそこで、果てもなく多くの声が立ち昇る、もうそうなっている。そこへと行っては、その声の根を掘れば、ごろごろ硬いのが面白過ぎる位に掘り出せる、でも面白いばかりで良いのかな、だってこの水の涸れた地べたに、またぞろごろごろ硬い石ころころばかり、どうにもならない。いや、よくよくしかし撫で回していれば石ころじゃない。耳を当てれば細くて短いけど羽の匂いがちらちらと染み降りる、耳の底へ。その匂いは耳の底で根を張れば、透き通った柔らかい翼の、木へも空へも繋がって拡がって弧を描いて伸びる音を響かせて。いや確かにそうかな、一つ拾って、その石のような上って面に爪を立てたり指で摩ったり、微かに引っ掛かる羽っぽい感じを、諦めずにちくちく毟ってみる。他に分かりようがないんだから分かるまで毟り続けると、産毛のように生えて来る血の筋の芽を毟っているんだ、ならやはり石は見せ掛け、そうやって血の芽を毟り毟りしていれば、そいつは硬い血の塊か何かで、それなら間違いなく生きていて、

羽を毟られる痛みに泣き喚く声までちくちくと指に掛かって、ならその口が有る筈とその口を吸う。何処が口もなかろうに、それでも吸えばそこが口と吸って吸って、遂には血の味が欲しくて。でも僅かに垂れ出る汁は屍の匂い、水の味、ひょっとしてあの池の粘粘の。それは知れないが、数知れない屍が溶けて低くへ流れ集まれば時を経て淵にでも淀んで、それが水の姿とは知れ。ただ淵なんて望めない。見せ掛けだろうと、乾いた石ころの積み上がるばかりでは。あのそれを殺してこれらがあるなら、これらも殺すしかないのは理と言えば理、真逆の理もありそうだが何処にも現れそうになく。それでまだ口を吸うのを已められないのは、決して血の味を嗅げもしないと見て取るためか。仮にそうでなくてもそうなってしまうその景色に、殺されるためにだけ身を投げよう、なんて思わなくても、そうして来たんでそれを殺せたし殺さなければならなかったんだが、そんな事を分かってしまって良いのかな、と項垂れて、その見詰める乾いた土の奥、岩の脅し声の相変わらずのっぺりとはしているが、その声の上っ面を撫でて薄く拡がる水の膜のように流れる匂いが、目には突き刺さって、その痛みが引き出す血の匂いの涙は、血の色をしているなら涙でなく血で、舐めると、血の味は知らないが、それは水の味でだけはなく、目に染みる光りの加減で、様様な味を繰り出して噴き出し溢れ、血はみるみる腐って様様な味を小さな坩堝に溶かし込むように固まるのか、刺すように瞳へと埋まるなら、そ

の目に映る拡がりは、盲いたかに血ばかりでは。と思いきや、空も木もなく透き通る限り、そこに一つだけ、重そうな刺刺した陰に打ち拉がれて転げ回る塊は、決して屍の匂いなんて寄せ付けない。血を通わせもせず、何故なら、血の見渡す限りの透き通る中を巡り続ける音で溢れているから。屍を尋ね求める呼び声の、嬉しそうにきらきらと輝くように。そうならそれって、それを殺せてなかったんじゃないのかな。それは殺されずにいるまま、引き摺り回されて、首は捥げ、背は潰れて液を押し出し、腸は千切れて飛び散り、脚は擦り切れて焦げたように黒ずんで、それでも刺より鋭く息は、吐いては吸われ、吐いては吸われ、(二〇一四年八月十五日)

(まさか水の上で出会して…)

まさか水の上で出会して、直ぐ目と鼻の先でも、暗くて分かり難いけど、別の流れに乗っているなら、擦れ違うしかない。と決まった訳でもないのに、そうさっさと決めて行き過ぎるのは、己の方の流れだけは読んでいるようで実は迷っているからで、行き違われた方の流れは、真っ直ぐ明らかで迷いようもないが引き返しようもない、水の果てへと。迷っているから引き返せるにしても、

引き返したところで迷ったまま、迷いは深まる。で、語るべき事が、その行き違う二つになってしまうようでも抑も語る事が何に値するか、水の上で。などと言う考えが浮かんでは沈めば、行き違われた方の、例えばそれが、飽くまで例えばそれが、冷えた我が子を傍らに抱く女なら取り敢えずは泣くだろうか、あざとくも、迷いを水の向こうからでも呼び寄せられるかに。それも諦めれば、ただ恨むに違いない、迷いようもない流れを、水の向こうまで真っ直ぐに見詰め。そんな姿が見え隠れでもすれば迷いは底無しで、死へと誘う水の流れにも救われはしない。しかし例えばそれが、ものを言えるようになったばかりの澄まし顔の幼子独りなら、泣いたりしない、恨みもしない。きっとただ、何処へ行っても変わらない一つの事、骨について、誰に問われなくても語る筈、何処の誰へも、乳の香りの息のようにはっきりと。その小さな確かな骨の他に、語るべきは何もない、そう誰もが気付いてはいるが語ってみたところで、有耶無耶の尻切れ蜻蛉が関の山と幾度もがっかりさせられたなら、子供の声になら懲りもせず、うっかり耳を傾けてしまうのも有りかな。と言う訳で、その子供の声を、耳の底に骨の一欠片と埋め込んだかの擽ったさは眠りに障って、切れ切れの水の夢が瞼の裏に滴るにしても、さてその続きをと水辺を探しても、埃っぽい道は狭く曲がり拗るばかり、水辺に行き着けないのは何故。しかしもう喉もカラカラで何を考えるのも面倒なら、水は諦め、疲れた足の止まった所で突

っ伏して目を瞑り、切れ切れに滴る夢の隙間を埋めようとでもするしかないが、そんな事、出来るのかな。出来るよ。そのために、小さな声の一欠片を耳の底に埋め込んだんだろ。その行方が何時からか知れなくなっているって？　構わないさ、その語られた骨の色が、水を見下ろせるただ一つの岩山の頂のその裾を濃く覆う森の香りの煙るように耳の底に切れ切れの渦を浮き立たせては骨の上っ面に細かく乗って、骨の色は、まるで書ける限りの筆順の文字を集めて重ねたように数え切れず、しかし森の香りが、そこまでは嘗て、あの時、一息に水に沈んだ証しと思い出されては、骨の色など、そこに骨のあるのに比べれば海を映す雲の陰程にも覚束なく、ただ骨のように白くないと見えれば事は足りて。それで行方の知れない声の欠片は、行方の知れないまま、行方は確かに知られるじゃないか。耳はもう、骨のように白くない骨の欠片に引き回されて磨り減って形もなく、剥き出しの耳の底に開いた穴の奥から覗く目の裏は真っ直ぐで硬過ぎて、その骨の上っ面に輝く、決して水に映らなかった色ばかりにその目を奪われれば、片言で子供にさらりと語り尽くされた骨の有りのままの姿が、決して忘れようもなく、とは詰まり、もう誰彼のだろうと裸の目を潰してしまいそうで、それを、骨のようにも何のようにも白くはないが、決して水には映りそうにないギラギラと白い布で包んで置いて、さてそれでまた無いとも分かっていそうな水の夢の続きへ逃げ込もうとでもすれば、水の仄明るく遠い

向こうの果てのない子供の影に冷たく抱かれて静かに佇むばかりのような強張る姿は変わりようもなく女のままで、誰彼だろうと虚ろな言葉は交わせて温かそうに斜めを向いて、そうか、影に抱かれるばかりでは水に流されてしか息は出来ないかと思い当たれば案の定、水の影で、それは。それでまた深めたままの迷いが死へとも誘われずに甦るとは出来過ぎと、短過ぎてザラザラした夢から力尽くで醒めるように、白い布のギラギラの端端に、見える筈のものがあるならそれは、水に映ろうが映るまいが白と言う白を食い破ったその奥の、色であるには硬過ぎる尖った骨の見えるか見えないかの小さな欠片の繋がりを、見付けないでは居られない。繋がりには解れ目も破れ目もない。そうであるしか有り得ない一息の一筆書きの滑らかさだけが、水だの死だのの取るに足らない夢から身を遠ざけてくれるだろうね。いや夢と見えたそれらはどれも、水の上で交わされた片言の耳の何処かに置き忘れられた冷たい響き。その響きを打ち消すように立ち昇る腐った息の匂いから流れ出す無闇な色が、時の中に夢を閉ざして決して消せなくしてしまう。成る程、それで死のうにも死ねないって訳か、なんて声のそのあからさまな、女のあざとささえ歯が立たない、鼻を吹き千切るかの生臭さ。でもそんな生臭さを掻き分けてしか、掻き分けるしかないから、だよ、布の上の繋がりは確かに繋がらなければと分かればどう、しめたものと喜べたりも、と、ここで終わりに出来ないかな、なんて。そんなの、はっ、

て笑い飛ばす前に、笑い飛ばされるしかないけど誰に。まさか、って他に居ないし、あの子供の声に。だろ、だからそれでぐるりと静かに息一つ立てずに繋がった、だから誰にも言わずに静かにね。水でも眺めて、眺められる水も水に沈んでしまえ、その沈めた水も水に沈めって呟いて気を鎮めて。でも水辺まで行き着けたんだっけ、てないよね、なら水辺の方から遣って来てくれたかも。子供の声を忘れなければ、いや子供の声な筈がない。子供じゃないし声じゃない、ただ骨である骨とか、その静かなままなら、いやまさか、それこそ違う、と言わなければきっともう、疾っくに何も言えなくなってるだろうけど、で何がいけないのかな。何がいけないのかなって考え続けたいのかな何処で。それを探していたんだよ。で何処でって言えば早速見付かった、その何処でって言ったここ、その何処かは。だって何処かなんて他の何処にもないじゃないか、って、水辺が遣って来てるかも知れない辺りから聞こえて来なければ考え続けるなんて少しも出来ない。でももう忘れてしまってる水辺の景色なんて、（二○一四年十一月九日）

断片　二〇一四

著者　u_

© 2014 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published